

12月



いけばな

桑原専慶流

テキスト

2013年

12月号

No.606

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





冷たい風

仙溪

中庭の山茶花がいつのまにか枝いっぱい咲いて目を楽しませてくれている。

寒い季節がやってきた。父が亡くなつて一年。振り返ると多くのことが頭をよぎる。けれども、去年は二度訪れた東北も、今年は一度も行かなかった。東北の冬は長く厳しい。

毎日お風呂に入れて、温かな食事ができることを幸せに思う。できれば来年はまた仲間と行ってきたい。花は人の気持ちに優しく寄り添ってくれる。

畑を耕し、収穫して暮らしの糧を得る。漁をしたり、ものを作ったり売ったりして私たちは生きてきた。そんな素朴な営みができなくなってしまった人が増えている。

原発事故はあるはずのないことだった。日本には54もの原発があり、ほとんどが都会から遠く離れたところにつくられ、都市も地方もその現状に甘んじている。人の欲が生んだ金融危機の影響も大きい。世界各地の紛争も絶えない。

個人ではどうしようもない大きな流れに、知らぬ間に押し流されようとしている気がする。しっかりと足を地に着けて、自分で考えることをしないと、おかしいところへ連れて行かれていることすら気づけない。

温かな部屋にいても、冷たい風の、あのつらさ痛さを想像して、自分できちんことをしていきたい。

漆器の鉢にいける

△表紙の花▽ 櫻子

塗りの器に花をいけると、あらたまった感じになる。作例の大鉢は果物を盛ったりして使っているが、水仙や椿との相性がいい。梅擬の赤い実もよく映る。

花材 梅擬（繡の木科）

水仙（彼岸花科）

寒菊（菊科）

花器 溜塗大鉢

赤い釉葉の花器

△2頁の花▽ 櫻子

焼き物の赤色は出しにくい色だそう。金を使うこともあるそうで、そうするととても高価なものになる。でもどうしても赤い器にいたい時がある。この器は無理を言ってつくってもらったものだ。

花材 月桃の実（生薑科）

薔薇二色（薔薇科）

花器 赤色釉陶花器

白と黒の器

△3頁の花▽ 仙溪

家には白と黒の花器がいくつかあるが、どれもモダンな感じのいけばなになる。作例の木瓜と椿を備前焼にいたら素朴な印象になるが、この器だと粋な感じがする。

花材 木瓜（薔薇科）

白椿（椿科）

花器 陶花器（竹内眞三郎作）



除真のきしん 松の立花

仙溪

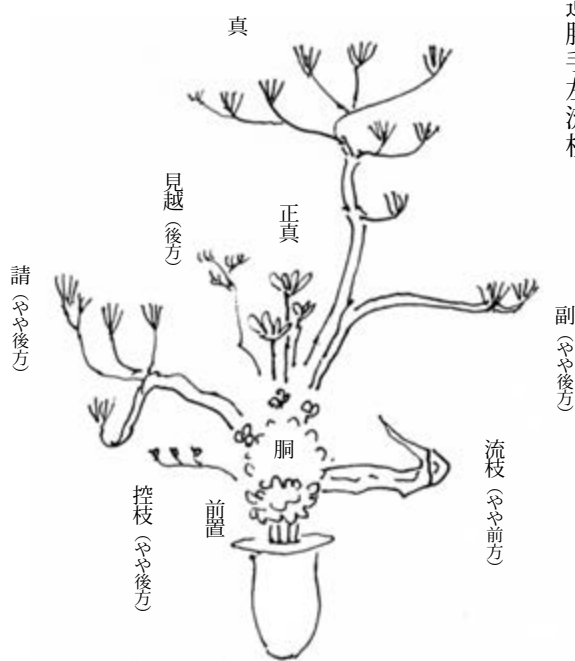
日本いけばな芸術九州展に松の立花を出品したので、会期終了後持ち帰って数日後に撮影した。一部いけかえているが、松や躑躅は京都と福岡を新幹線で往復したことになる。長旅ご苦労様だったが、福岡でも京都の家でも、多くの人に見てもらえたことが嬉しい。

松は古い葉を掃除すれば、付け枝でも勢いは保たれる。時々霧を吹くことで緑も褪せにくい。特に立花で松を扱う場合は、古い葉の掃除に時間をかける。指先が松や二で真つ黒になるが、全体に引き締まった印象になり、枝も生きてくる。

先月号では近松門左衛門の浄瑠璃に立花が扱われているのを紹介したが、もつと以前に書かれた能や狂言の中にも立花（あるいは立て花）を題材にしたお話はすでにある。能の「半蔵」「真尊」がそれで、「半蔵」や狂言の「真尊」がそれで、「半蔵」には立花供養が、「真尊」には立花の真の松を探しに出かける場面が描かれている。どのような内容かは次号で紹介してみたい。

松の立花を立てていると、流祖の活躍した江戸時代前期や、能・狂言の書かれた室町時代と今とが、ちゃんと繋がっていると感ずる。古典花はもちろんのこと、盛花・投入にも古の精神は受け継がれている。そんなことを思いながらいけている。

逆勝手左流枝



花型 行型 逆勝手左流枝
花器 天女模様銅花瓶
花材 真・副・請・・・松
正真・・・菊
見越・・・檜
流枝・・・晒木



写真では奥行きがわかりにくいので、花展出品作の斜め横からの写真を参考に掲載しておきます。

控枝・胴・・・躑躅
前置・・・柘植（花展では松）

レモンちゃん

食卓の窓側にはガラス花瓶に残り花を短くいけている。ガラス器だと水をいつも綺麗にしておかないといけない。時々レモンちゃんがその水を飲みに来て、そのまま外を眺めている。日射しに白い毛が眩しいね。



西洋館に秋を彩る
桑原専慶流関東支部いけばな展



ウェルカムいけばな

心地よい空間

あなたは何のために花をいけるのか。と問われたら何と答えますか。「自分の美の世界をいけばなで表現したい」

「いけた花が新たな命をふきこまれて輝いてくれるのが好き」

「とにかく花をいけると心が落ち着き、豊かな気持ちになれる」

ただ花をいけるといふことにも、人それぞれに色んな思いがある。

また、「今日はお客様がこられる

から、花屋さんで花を買っていけておこうかしら」というような素朴な気持ちで花をいけることもあるだろう。訪れたお宅に花がいけてあると、やはり嬉しい。大切にいけられた花からご主人のもてなしの気持ちが伝わってくるし、なによりもその部屋にいるのが心地よい。

以前、フランス北部のノルマンディーに大きな風景式庭園を持つ貴族のお宅にお邪魔したことがある。その時通された居間に、庭から切ってきたコブシの大きな枝がそのままの姿で壺にいけられてあった。アールドゴ調の大きな明かり窓からさす

光と、無数のコブシの白い花が強く印象に残っている。

花がいけてあることで、その場がとても居心地のいい空間になる。別の言い方をすれば、花がいけられていることで、その場に心地よく迎えられるような気持ちにさせてくれる。それこそいけばなの大きな魅力の一つだと思うのだ。



関東支部の皆さんと横浜山手にある西洋館を花で飾る催しは、今回で4回目になる。横浜の佐藤慶真先生がいつもボランティアで花を飾ってこられた縁で、2日間の花会をさせていただいた。従来のいけばな展ではなく、あくまでも来館者を迎える花として。

今回お世話になったのは「外交官の家」と呼ばれる洋館。ニューヨーク総領事やトルコ特命全權大使などをつとめた明治政府の外交官内田定槌氏の邸宅で、もとは東京渋谷の南平台に明治43年に建てられた。設計者はアメリカ人で立教学

校の教師として来日、その後建築家として活躍した「Z」ガーディナー。京都の長楽館（旧村井別邸）もガーディナーの設計だ。

平成9年に横浜市は、内田定槌氏の孫からこの館の寄贈を受け、山手イタリア山庭園に移築復元し一般公開した。同年、国の重要文化財に指定されている。

驚かされるのは丁寧な復元だけでなく、室内の家具や調度類も再現されていることだ。聞くところによるとカーテン一つとっても、使われていたのと同じものを特別に京都の龍村織物でつくってもら



うほどの念の入れようだったそう
だ。まさに当時の外交官の暮らし
を体験できるように、との熱い思
いがこもっている。

特別な思いのこもった館内だか
らこそ、家具には「手を触れない
てください」という札が置かれて
いる。無料で一般公開されている
のだから当然だ。美意識の高い空
間をのちのちまで残すために、天
気の良い日には太陽側の窓に、さ

りげなく白いロールスクリーンを
下ろして廻り、強い日射しをやわ
らげるということもされている。

そんな館内に花が飾ってあると
「大事な建物だから、気をつけな
い」という緊張感よりも、「外
交官の家に招かれた客人」という
気分になる。貴重な建物を鑑賞す
る、というような距離感ではなく、
「ようこそいらっしやいました！」
という温かな気持ちを感じる空間

に変わる。



館内の花の場所を事前に出品者に
割り振って、それぞれの空間を意識
しながら器や敷物を考え、花をいけ

てもらった。独りよがりではなく、来
館者を意識しながらいけられた花
は、どの花も部屋に調和していた。
数種類の敷物を持つてこられて、雰
囲気に合うものを現場で選んだり、
90度どの方向からも見られるよう
にしたり。そのようにして、「よう
こそ」の気持ちがかめられたいけば
なはいけられていった。

最初に書いたが、花をいける思い
はいろいろあつていいと思う。でも、

今の世の中に「ウェルカムいけば
な」が必要とされていると強く感じ
る。花と花の空間を意識して、花自
体が気持ちよく感じてくれるように
いけられたいけばなは、見る人も心
地よくしてくれる。そんな花のまわ
りでは、人と人も心地よい関係にな
れる気がする。

皆で心地よい空間をつくらう！

暮らしの中に、社会の中に、ウェ
ルカムいけばなを！





ワタノキ

仙溪

濃いワイン色のパフィオペディルムと綿の木を取り合わせてみた。意外な組み合わせだが、どちらも面白みがあり、質感もフワフワとツルツルで互いに補い合っている。ただ、緑がないので赤いスプレーバラを加えた。薔薇の赤色が、パフィオの赤みと相乗効果を発揮して暖かみのあるいけばなになっている。

数日後、パフィオが萎れたので湯上げて短くいけたところ、20日たった今も元気である。

花材 綿の木（わたの木 葵科）

パフィオペディルム（蘭科）

スプレー薔薇（バラ科）

花器 舟形陶水盤



寒桜 〆10頁の花〆 仙溪

花型 草型 副流し

花器 銅花瓶

今年の寒桜は良い枝に恵まれた。比較的ねばりがあり、撓めやすい枝で、枝の縮まりもいい。ある程度の太さもあり、足元がほぼ真つ直ぐだった。ちなみにいけばなで寒桜と呼んでいるのは子福桜ではないかと思う。

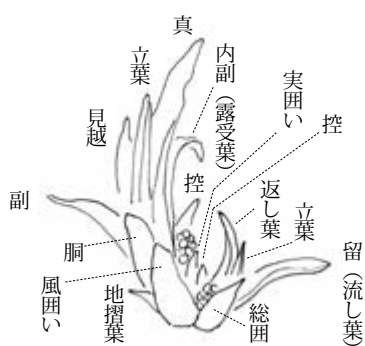
寒桜は晩秋から初冬の枯淡な生花の稽古に欠かせない。(薔薇科)

万年青 〆11頁の花〆 仙溪

花型 十五葉一果

花器 陶水盤

正月花の作例。常緑の葉と赤い実が新春を言祝ぐ。産地で葉の大小をバランス良く組み合わせて出荷される。生産者の技量がいけばな文化を支えている。(百合科)







出合い花（3） 櫻子

サンバとポインセチア

サンバとは兵庫県で開発された新しいオリジナルの菊で「ひょうごサンバマム」という。2006年から品種改良が続けてこられた。

サンバのように華やかな洋種の菊で、踊る花びらというところらしい。私が選んだのはウエディング・サンバ。白の一字菊といっても良いと思う。

京都の花屋さんには今年初デビュだ。他にもオータム・サンバやプリティ・サンバなどの色違いがある。

ネットをかけて売られているので、アナスタシアと同じようによく目立つ。特別扱いの花だが、糸菊や嵯峨菊のように日本的な菊と合わせるのは難しいと思う。

ポインセチアも園芸品種としては毎年ニューフェイスが目見えする。

あれこれ悩んだ末に、アンティーク調のガラス器に短く並べてみた。どちらが主でも従でもなく、花の形の対比と色の対比がはっきりして、意外にいい感じ。新鮮な花型。クリスマスの粉雪が舞う中で咲く二種の花。

花材 菊「ウエディング・サンバ」

（菊科）

ポインセチア（燈台草科）

花器 ガラスコンポート

いけばな

桑原専慶流

テキスト

2014 年

12 月号

No.618

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





出合い花（15）

△表紙の花▽ 仙溪

アマリリス

レックス・ベゴニア

以前、インドから持ち帰った牛の置物の背中に、ガラスの酒杯をのせていたのが、ベゴニアをいけた最初だった。手作りの真鍮製の鞍で器を固定したのだが、苦勞の甲斐あって父がたいそう褒めてくれた。

牛にいったのはアイアンクロスというベゴニアだったが、この赤いアマリリスの相手にはカンカンという名前がついていた。葉の表面が銀色に光り、私の手のひら程の大きさがある。

アイアンクロスもカンカンも、インドからベトナムにかけて分布するベゴニア・レックスからの改良品種。アマリリスは中南米原産。赤と黒のガラス花器は北ドイツで父が買ったもの。この小作にも様々な物語が詰まっている。

花材 アマリリス（彼岸花科）

レックス・ベゴニア

「カンカン」（秋海棠科）

花器 赤黒ガラス花器

寒桜（子福桜）

△2頁の花▽ 仙溪

なぜ冬に咲く桜があるのだろう。十月桜、冬桜、子福桜など、年に二度咲くのはなぜだろう。

一説には日本の桜の先祖とされるヒマラヤザクラがもともと秋に咲くことから、先祖返りの現象と考えられている。

ヒマラヤザクラの咲くネパールは緯度的に



は亜熱帯。冬の気温は東京よりも高い。秋咲きであつたものが、日本の厳しい寒さに耐えるために「休眠」することを身につけ、暖かな春に咲くようになったそう。百万年の歳月をかけて東へ東へと来てくれたサクラ。その中に故郷を懐かしんで秋に咲くものがあつてもおかしくない。

私達はそんな冬に咲く桜を見て勇気づけられる。ひよつとすると、人を励ますために咲いてくれているのかもしれない。日本人にとつて桜はやはり特別な存在である。

花材 寒桜・子福桜（薔薇科）

菊三種（菊科）

花器 陶花瓶（宮下善爾作）

白玉椿をいけて

△3頁の花▽ 櫻子

今年は庭の山茶花や椿が例年よりも早く咲き始めた。蔵の前の山茶花が大好きで、咲く時期をいつも心待ちしている。蕾も早い時期から沢山つけ始めて、十月末には一斉に咲き始めた。いつもなら十一月に入ってから先ず最初の一輪が開くのだが。

昨年植えた白玉椿も同じ頃にひと花咲いた。椿の木は庭に多いのに、今まで白玉椿が無かったのは不思議なくらい。椿の種類は多いが、葉が形良く格好も良くていけやすい椿はそんなに多くない。敷椿や白玉椿はさり気なく足元に収まってくれる。

台切りデンファレと若松と取り合わせた。

花材 若松（松科）

白玉椿（椿科）

デンファレ（蘭科）

花器 陶花器

水仙

花形 行型

花器 陶水盤

天仙、地仙、水仙という言葉があつて、草花の中でも最も高貴な感じを

仙溪

もつ花といわれる。初冬十一月より晩冬の二月まで、初季、盛季、晩季の三期にわけて挿法が定まっている。

初季には花二、三本程度で葉組の

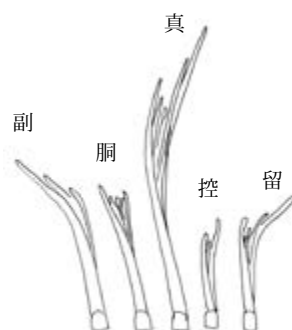
中に花を低く入れ、袴も低く見せる。

十二月に入つて盛季となり、やや花高く挿して五本程度まで。花を入れない三枚組みも加えて七本程度まででいける。袴もやや高く見せる。

一月下旬より晩季。多少乱れの心をあらわし、開花を多く入れ、三枚組みの若葉を少なく入れる。

花器の変化によつて、それに適した花形をつくりあげる。

作例は水仙五本の生花で、初季から盛季へ移る中間といった花形。十二月中旬にいけるなら、もう少し花の位置を高くいける。



立花秘傳抄 四 (前号の続き)

十三ヶ條法度の事

大輪なる花のたぐい短く指すこと。

葉のある物を花ばかり指すこと。

花とその葉と添えたる間に、余の物を指す事

同じ物を二所に指す事。但し色替わりては苦

しからず。

草にて木をつつみ、木にて草をつつむ事。

たけくらべの事。(一方除て上ることずえの同じき

は苦しからず。)

枝葉の水につかるようになる事。

切枝とて十文字に見切る事。

本きれの事。

指枝とて面へ長く出る枝の事。

壁枝とて後ろへ長く出る枝葉の事。

後ろより前へまわる枝の事。

瓶の口よりさがる枝葉の事。

以上

古代十ヶ條法度の事

ぬきとをし

主さす枝

ふくめんの枝

なけきの枝

見越の枝

胴ぎりの枝

両頭の枝

いだく枝

かさなる枝

引張枝

以上古き板書に出たり

右の外三十六ヶ條伝授の法度有定名目の法度

共名付く



⑦同意にて嫌うべき枝の事 外これを略す

立花八戒

花白衣にて指事

庭木みだりに所望の事

他流の花を誹そしる事

主ある花形盗みて指す事

花を指すを後ろに立って見る事

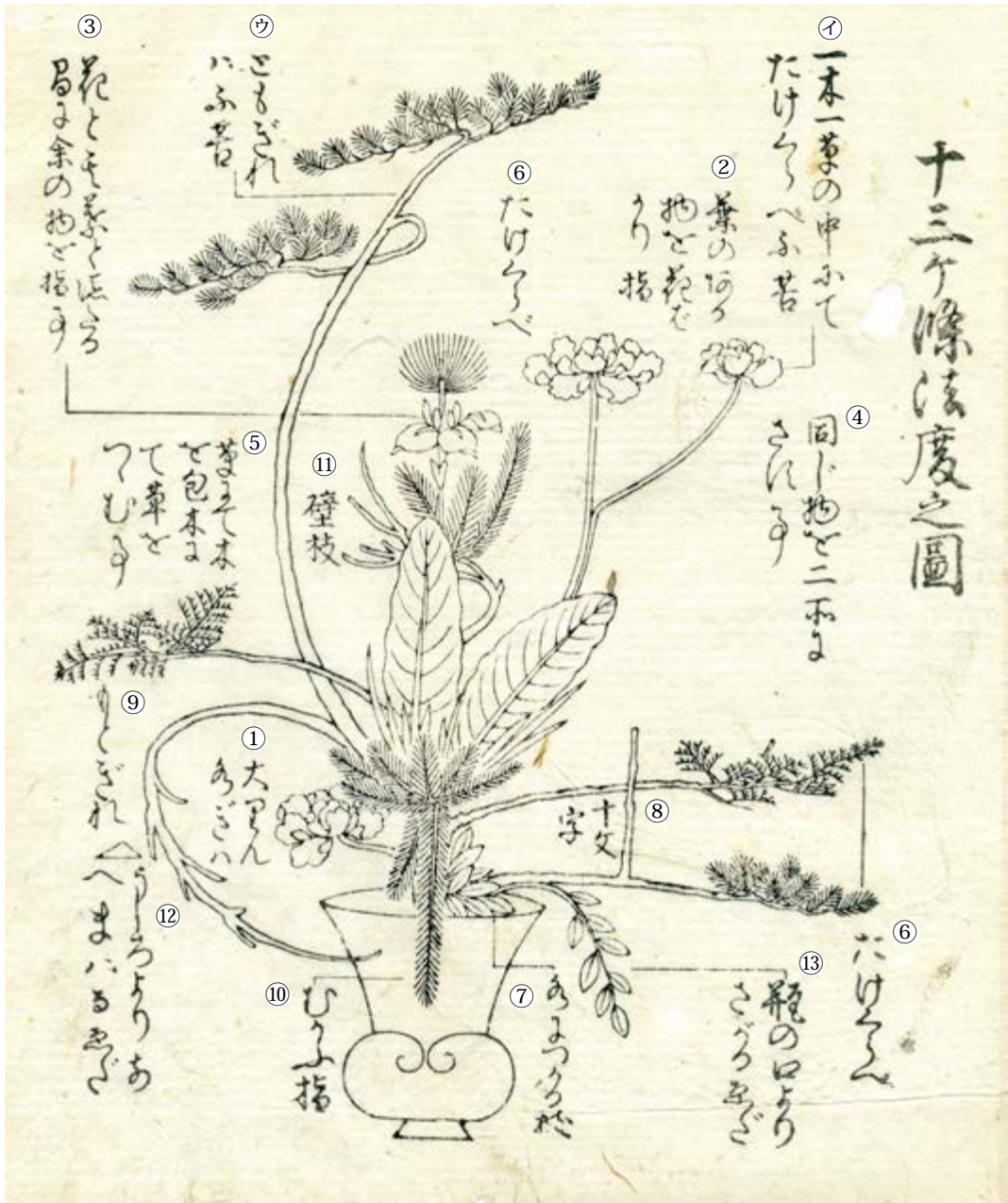
花礼儀なくて見る事

人の花率そつじ爾になおす事

心花にあらざる事

(8頁へつづく)

十三ヶ條法度之圖



十三ヶ條法度の図

- ① 大輪水ぎわ。
- ② 葉のある物を花ばかり指す。
- ③ 花とその葉と添えたる間に、余の物を指す事。
- ④ 同じ物を二所に指す事。
- ⑤ 草にて木をつつみ、木にて草をつつむ事。
- ⑥ たけくらべ。
- ⑦ 水につかる枝。
- ⑧ 十文字。
- ⑨ もとぎれ。
- ⑩ むかふ指し。
- ⑪ 壁枝。
- ⑫ 後ろより前へまわる枝。
- ⑬ 瓶の口よりさがかる枝。
- ① 一木一草の中にてたけくらべ苦しからず。
- ② も切れば苦しからず。

立花十徳

卑いやしうして高位に交じる

花に他念無し

衆人愛敬

語らず友と成る

草木の名を知る

席上常に香ばし

朝暮風流

諸惡離別りべつ

精魂養性

事とせずしてつかえ仏縁あり

立花十体

正風体 真の花をいう

幽玄体ゆうげん 除真立をいう

景曲体けいきよくてい 砂の物をいう

野沢体やたく 草花立をいう

池中体 水草立をいう

山頭有草体さんとうゆうそう

山下有竹体やうちく

枯木強力体こぼくこうりよく

一色体いっしき

乱曲体らんぎよく

右立花八戒、十徳、十体、ある師家秘書を写してこれを記す。

五節句の花、並びに 十二月に用うべき花、目録あるといえど、花の盛り遅速ありて、時節にたがい、又所によりて、まれなる草木もあれば、一応には定めがたし。とかくその時節相応の花、所々の珍しきをもって立つべきなり。

祝言に嫌うべき事

一草一木。一花二葉。六花六葉。四花四葉。四草四木。末のとまりたる物。枯れたる枝葉。苔晒木。名のあしき物。同釋教の名ある草木を嫌う。

茶会の花ならば、六花六葉、四花四葉、指し

ても苦しからず。又貴人高位より給わる花ならば、一花一葉にても立つべし。花の数多くとも、残さず指すものなり。

寺院の花には、釋教の名ある草、祝儀に嫌わず。雁足などは、古来より嫌う。外これになぞらえて知るべし。

立花にかつて用いざる物。香りのあしき物、いばらのたぐい、雑木ぞう、雑草、食物の類いなり。わたましの花に、檜ひのきという名あしけれど、又火のくと云う義理をもつてこれを立てる。又あかき花、あかき葉、赤き実のたぐいを、いむといえども、水木ばかりは水と云える名ありとてこれをゆるす。火のくと云うも、水木というも、むつかしければ、ささぎらんにしかじ。

古き花書に云わく、婚礼の花には、赤き花をむこ賀のかたにさし、婦のかたにては、白き花を指すというは、夫婦陰陽の義によるか。蓋しけだ赤きは陽にして末さかえ、白は陰いんにして不祝儀なり。婚礼の夜も色なおしとて、赤き衣服を用いる時は、婦の方とて、赤きを用いざるべけんや。

(釋教…釈教、釈迦の教え、仏教。蓋し…まさしく。)



シチュー鍋に付けて

櫻子

シチューの中味がフクフクと煮え立つ様な雰囲気です。青文字や枯れ紫陽花を付けてみた。

青文字は枝が折れやすく、先が尖っていて枝を集めるようにいけるのは難しい。

もつと沢山枝を買えば良かったなと反省。

青文字は早春の頃花を咲かせる。一つの蕾の中に3〜4個の花が内包されていて、咲き出すと全体がボリュームアップして可愛い。

クスノキ科の木なので良い香りがある。切り口は山椒の香りに似ているようにも思う。種子は辛いので、生姜の木ともよばれる。木肌が青いので青文字なのだが、黒文字よりも柔らかい気がする。

時折よく確認せずに黒文字の楊枝を買ったと青っぽい木肌の楊枝であったりして要注意！これは青文字だと思ふ。

シチューの中味が冷めない様に、暖かそうなシヨールで包んで。

花材 青文字（楠科）

紫陽花（紫陽花科）

薔薇（薔薇科）

花器 陶製シチュー鍋

第65回華道京展

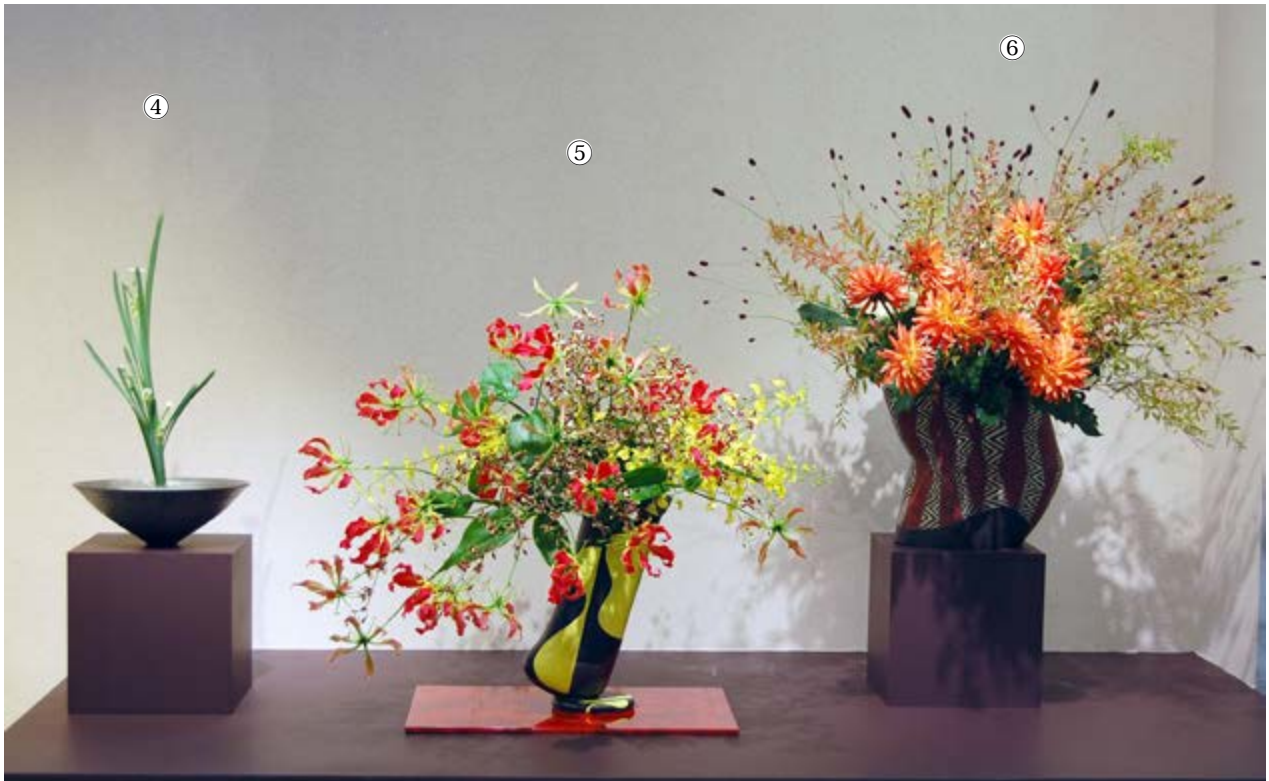
テーマ「煌めいて京の花」

①



②







草木の風興

仙溪

古い花書に「風興」という言葉が出てくる。室町時代後期、立て花の名手であった池坊専応の口伝を記述した「池坊専応口伝」は、次のような文章で始まる。

瓶に花をさす事、いにしえよりあるとはきき侍れど、それはうつろしき花をのみ賞して、草木の風興をもわきまへず、只さし生けたる計なり。

この一流は野山水辺をのづからなる姿を居上にあらはし、花葉をかざり、よろしき面かげをもとし、先祖さし初めしより一道世に広まりて、都鄙のもてあそびとなれる也。

この文章のあとにも、「絶景もそこへ行かねば見られないし、絵を見ても夏涼しくはならず、秋に香りがするわけでもない。庭に山を築き泉を引くのに大変な手間がかかる。（それなのに）僅かな時間で床にいけられた、ただ少しの水と小さな枝が、奥山の勝景をあらわし、風の匂いまで感じることができるのはまさに妙術。草木を見て心をのべ、春秋のあわれを思ふなら、その悟りの種を得ることもできるだろう。」と述べている。

「立華時勢粧」が世に出るのは「専応口伝」からおおよそ五百年後。そ

の序文でも「ちからをいれずして高き峰、深き溪を小床に縮む。至らずして千里の外の勝景をみることに、その術、諸云の及ぶところにあらず」とある。また、「立花八戒」の中では「花にあらざる事」を戒めている。

おそらく富春軒仙溪も、「草木の風興をもわきまへず只さし生けたるばかり」ではいけないと考えていたにちがいないが、百五十年の間にシンプルな立て花は、より複雑な立花になり、形式化してゆく中で、今一度自然に目を向け、「出生の景気」を大切にすべきだと書いている。

風興という言葉は漢和辞典に「風趣興味」と説明されている。「味わい深いおもむき」とも言いかえられるだろう。

自然に目を向け、出生をよく理解することと同時に、心に留めた草木の風興をいけるようにしたい。

初冬の風興

△12頁の花▽ 仙溪

秋の木瓜、咲き始めた水仙、寒菊の赤い葉。この三種のとり合わせは過去にもよくいけている。ただ丁寧にいけるだけで、初冬の風興が感じられる。どんな器にいけるかにもよるが。

花材 木瓜（薔薇科）

水仙（彼岸花科）

寒菊（菊科）

花器 陶花器（河井透作）

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2015 年
12 月号
No. 630

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





季節感ととり合わせ

櫻子

色鮮やかな実がたわわについたマユミ（檀）の枝。まさに季節の輝きそのものだ。黄色の嵯峨菊で華やぎを加え、白椿で品良くまとめた。花器の紫色も格を高めてくれている。

作例の3種の花材と器。この4つのとり合わせのどれか一つが別のものになれば、違う雰囲気はいけぱなになるだろう。この組みあわせがベストとは思っていない。でも私が出したと思った晩秋の色合いは出せたのじゃないかと思っている。

マユミと白椿は組みあわせの定番だが、そこに鮮やかな黄色でしかも可愛らしさを備えた季節の花を加えたかったのだ。嵯峨菊がとてよく似合うと思う。

花材 檀（マユミ 錦木科）

椿（カキ 椿科）

嵯峨菊園芸種（菊科）

花器 紫紅釉花器

◆横から見た、いけばなの奥行き。





プリンセチア 櫻子

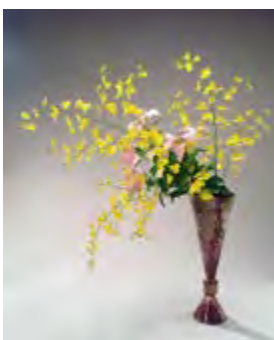
ポインセチアが花屋さんの店先に並ぶと、ああ、もう12月なんだなと気づかされる。最近はクリスマスカラーのポインセチアばかりでなく、白やピンクの花も作られるようになった。

今年とても綺麗な色だなと買い求めたのはプリンセチアという品種。華やかなピンクの葉が隙間なく広がる新品种だ。軸も長いので、鉢植えから切り取り、オンシジウムと投げ入れにした。

メキシコ原産。トウダイグサ科のユーホルビアの仲間なので水切りして、切り口から白い樹液を流してかわらけると、良く水を吸い上げて日持ちしてくれる。暖かな場所に飾りたいクリスマスの花。

花材 ポインセチア（燈台草科）
オンシジウム（蘭科）
花器 金彩ガラス花器

◆横から見た、いけばなの奥行き。



基本花型にいける

主材 若松（松科）
副材 水仙（彼岸花科）
薔薇（薔薇科）
花器 陶コンポート（宇野仁松作）

若松を主材にした正月花の作例。
花屋には12月初旬の松市のあと、正月用の松が並ぶ。色々な松が売られるが、生花にせよ盛花にせよ、一番身近な松は若松である。

小枝の出た節から上は一年で伸びた部分で、強い生命力を感じる。作例のとり合わせは、花器の大きさにあわせて大きくも小さくもいける。小さな花器なら、若松1本

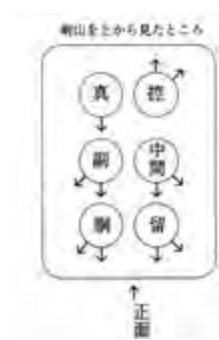
に水仙2本と薔薇1本でもいけられる。またそれぞれの本数を増やせば大きな花にできる。薔薇の代わりに千両をとり合わせてもよい。



◆横から見た、いけばなの奥行き。



立体真主型



◎剣山の主要部分の説明
それぞれの役枝を剣山に挿す場合、位置と方向は、およそ左の図のようになる。

① 小枝つきの若松を真の位置に立てる。花器とのバランスを考えて長さを決めているが、花器が小さめの場合は若松の主枝と脇枝を上下に切り分けていけてもよい。



③ 胴と留の位置に深紅の薔薇を加える。薔薇はいける前に充分に水揚げをしておくこと。薔薇が小さい場合は、バランスを考えて本数を増やす。



② 真の左前に副の若松を立てる。真主型なので、真よりも副を少し短くした。窮屈な小枝は切っておいて最後に加える。副についても花器の大きさによっては上下に分けていけてもよい。



④ 中間の位置に水仙を2本入れたところ。水仙の葉が広がらずに短くした。緑色の細針金で括弧をつけて整えてもよい。長すぎる場合は切っていく。控に水仙を加え、松の小枝で水際をつくる。(4頁の花)



それぞれの長さ。主材の長さは、花器の幅と高さを足した長さの1.5〜2倍を目安にして、水の中の深さを加えて切る。



立花秘傳抄 五

立花名目 並びに 訓解 (つつき)

前置まえおきの事

前置は一瓶の内、これより前へ長く出る物なき故、前置と名付く。前は先という心なり。古代、胴作りと前置をひとつに立のぼせて前置という。中頃より胴、前置と二つに分かれたり。さるによつて胴は七つの枝の外なり。

前置になる物、出生ひくくして横へ生える物皆前置なり。著莪、水仙、わくら、かなめ、これらの類たぐい前置にならず。このほかなぞらえて知るべし。

ある師の曰く、ぎぼうし、河骨、前置にならずと云えり。その道理いかにと尋ぬるに、立花七つの枝という時は、枝なき物は前置にならずと云えり。おぼつかなし。蓮花、芦、蒲がま、鶏頭、

水仙、これ皆枝なき物といえど、古来より七つの枝に用ゆ。もしまた茎と葉と分かれたるを枝なりと云わば、車を横におさんとするの類たぐいなるべし。

前置に古来より説々あり。一つには木末こずえ横へふりたりとも、前へ長く出たる物、前置になると云えり。一説には長く出ざれども、正面にある物を前置と見るべしと云えり。さにはあらず。前へ長く左右へかたよらざるは真の前置なり。かたよりにて長く出るは行の前置なり。引つ込みて正面に立るは草の前置なり。この理をよくわきまえて花を見物する時は、その惑いあるべからず。

除心立の前置は、胴のうつりを請けて左右へはづませ、前へ長く出して谷洞をかまえ、美花美葉をもつて幾重も景をとるを弥立やよと名付けて、巧者のなす所なり。

胴あざやかなる物ならば、前置はこまやかなる物。柔らかなる物ならばかたき物。草の心くさに

は前置かるく、木の心には前置おもく。ぎぼうしは陰陽をつかいわけ、笹は剣先をわきへふらせ、高き所の花ならば前置の先低くかたむかせ、対の花には同じ物を用いず。松、おもと、小しだを三ヶの前置と云う。相生心、二つ真、あわせ心、これ皆伝授の前置なり。そのほか常の花にも口伝これ多し。

前置は花形のかなめ、草木の根じめなり。前置浮く時は花形すわらず。たとえば人のつま立たてて立つるがごとく見にくき物なり。これ一つの習なり。

胴作りの事

胴と名付けしことは花書に云く、立花の形は天上天下唯我独尊ゆいがどくそんの御容みかたちをうつせり、といえるより胴と云うなるべし。これ瓶上の景所、花中の手所たてよこにして、縦横左右前後の大枝を育てる所なり。されば初心巧者によらず、精魂をくだくはこの所なり。

胴作り、祝言不祝言の立てようあり（口伝）。
胴は丸く景多きを専らとす。下手の胴には景少
なし。丸きものには細き物。かたき物にはやわ
らかなる物。こまやかなる物にはあざやかなる
物。白き物には赤き物。紫なる物には黄なる物
と花葉のうつりよく心得てさす時は、一瓶のす
がたあざやかにて見所多きなり。

控枝の事 ひかえ

控枝は七つの枝の外にして、真の花には出す
ことを嫌うといえど、草の花形に至りては心の
ふりによりて長く出し、請の木つきによりて風
流をつくす。これ花の一体なり。そうじて花形
珍しく指し出さんと思わば、長かるべき物を短
く出し、短き物を長く出し、副下控枝の間あき
に心を付、一作珍しき景を取るべし。又控枝な
き花形も面白きものなり。

立花腰の事 こし

流枝、控枝の後ろを腰と名付く。心おもき物

なれば、腰を松、檜などのつよき物にてあしら
うべし。腰よければ倒れるように見えるもの
なり。初心の内は前にばかり心つきて、後ろを
かならず仕残すにより花形すわらず。古人の云
う、花形は衣冠束帯して座するがごとく立つべ
しといえり。

水ぎわの事

水ぎわ夏は高く、冬は低く、草の両どめは口
伝あり。一方茂りたらば一方軽く、一方木なら
ば一方草にてとむべし。笹、小しだは少しひら
めに遣い、みやまは草の方に指さず。苔は水ぎ
わにて見せ、晒木は見せず。竹は一節を見せる。
外を略す。

水ぎわの指込は矢篠を結いたるがごとく、大
小出入りなく美しく繕いたるを大きに嫌うな
り。幹太きあり細きあり、出入りところどころ
ありて、又つかねてふつつかならざる様に立つ
べし。これ故実なり。

水ぎわに三師の流々あり。まず一流には草木
自然体を専らとして下草つくろわず、花はその
ままの枝を用い、葉はおのがはたらきにまかせ、
あつく無造作なるようなれども学びがたきとこ
ろあり。又ある師の流には水ぎわ軽きを好んで
下草うすく、たとえば名人の生花を一種一種よ
せたるがごとく、景気やわからかに一花一葉に心
を付て、はたらきあらずという事なし。誠に及
びがたきわざなるべし。又ある流には、しいて
花葉の奇麗を好み、花をならべ葉をそろえて、
水ぎわ結びしめたるがごとし。十人に八九はこ
れを好み、巧者は大に笑う。この三流、よくよ
くわきまうべし。





梅擬 菊

〈9頁の花〉

仙溪

花屋で洋種梅擬として赤と黄色の梅擬が売られていた。枝にびっしりついた実は大きくて色鮮やかだ。格調高い感じというよりは、大らかで潑刺とした印象を受ける。

とり合わせには梅擬と同系色の菊をいろいろ選んで遊んでみた。金茶色の糸菊と二輪菊、濃赤色の金糸菊、黄色とレンガ色のポンポン菊。撮影したのは11月初旬の菊たちである。

花材 梅擬2種（繡の木科）

菊5種（菊科）

花器 梅花皮釉水盤（木村盛伸作）

◆横から見た、いけばなの奥行き。



役目を終えて

〈表紙の花〉 櫻子

ノイバラや鈴バラが終わる頃、立ち姿のバラの実が少しだけ出回る。美しい花が咲き終わり、これだけ沢山の実をつけるには、株はかなりのエネルギーをつかうのだろう。

丈は短い、実は大粒で艶々としていて美味しそう。でも実際は食べても種ばかりで野鳥も見向きもしない。餌の少なくなった冬の頃仕方なく食べるらしいが。

グロリオサとアンスリウムの葉は片方に寄せておき、反対側にバラの実をかためて釣り合いをとっている。赤い器に、赤い実と赤い花。そこへ白いアマリリスを立てると12月らしい雰囲気になる。

花材 アマリリス（彼岸花科）

グロリオサ（百合科）

薔薇の実「センセーシヨナ

ルフアンタジー」（薔薇科）

花器 赤色釉花器

◆横から見た、いけばなの奥行き。





寒桜

仙溪

花型 生花 留流し
花器 耳付銅花器

ネパールの首都カトマンズでは、ヒマラヤザクラが秋に咲く。桜のルーツはヒマラヤ付近と考えられ、もともとは秋咲きであったのが、日本にやって来た頃には冬の厳しい寒さに対応するため、秋に咲くのをやめて冬の間は休眠し、春に花を咲かせるようになったそうだ。

日本で秋から冬に咲く桜には、故郷の記憶が遺伝子に残っているということかもしれない。

花屋には、十月桜、冬桜、子福桜などが寒桜の名前で出回る。写真の桜は八重咲きなので子福桜だと思う。近頃は寒桜をいけながら遙かネパールに思いを馳せている。

横から見たところ



インターネットの写真投稿サイト「インスタグラム」に日々の写真を投稿中です！
(www.instagram.com/gonchansensei)

琳派に習う

仙溪

左の写真は四条通のウィンドーを飾る「琳派400年にいける・いけばな展」に私が出品した花だ。

天井の高いウィンドーだったので、青竹を器にして紅白の実を上下にいけることを考え、デニム生地をバックに吊して赤と白を印象的に

見せる工夫をした。ウィンドーではガラスに風景が写り込むので、持ち帰って写真に撮った。

「琳派」を辞書で見ると、江戸時代における絵画を主とする工芸、書などの装飾芸術の流派で、本阿弥光悦と俵屋宗達を祖として尾形光琳が大成し、酒井抱一へと発展した。絵

画は技法、表現ともに伝統的なやまと絵を基盤とし、画面の豊かな装飾性が特色。とある。

今年は本阿弥光悦が徳川家康から京都鷹峯の地を拝領して四百年にあたる。

琳派の人気の秘密は何だろう。伝統の技と品格に磨きをかけて、新し

い着想と技法を駆使し、時代が望む新たな「美」をつくらうとした情熱が心を打つのだろうか。

「琳派」の技法やデザインを現代に生かすことも意義深いことと思うけれど、試行錯誤しながら新たな時代をつくる情熱こそ、この節目に見習わなければならない。

花材

南京蘆（燈台草科）

白玉椿（椿科）

繻の木（繻の木科）

数椿（椿科）

花器

青竹

陰陽五行

仙溪

私が陰陽五行に興味をもっているのは、なにも陰陽師になろうなんてことではない。ただ、一人の華道家として植物のことをより深く知りたいたいという思いとともに、人と自然の関わりを見直すヒントがあるんじゃないかと思うのだ。

陰陽思想と聞くとなんとなくかけ離れた古くさい迷信のような考えに思う人が多いだろう。まず陰と陽について、それぞれのような定義があるのだろう。中国古代哲学としての考え方を見てみよう。

原初、宇宙は天地未分化の混沌たる状態であったが、この「混沌」の中から光明に満ちた軽い澄んだ気がつまり「陽」の気がまず上昇して「天」となり、次に重く濁った暗黒の気すなわち「陰」の気が下降して「地」となった。

このことは中国の古典、『淮南子』（紀元前二四〇年）の「天文訓」に書かれているが、同じ内容が「日本書紀」の冒頭にも引用されている。

この陰陽の二気は、元来が混沌という一気から生まれたということが陰陽思想の要だと思う。（つづく）





出逢い花（25）

仙溪

無患子（無患子科）
むくろじ

藪椿（椿科）

無患子の枝をいただいた。丸い実がたわわについている。実には黒くて丸い種が一つ入っていて、半透明の果皮の内側で、ころころと動くのわかる。作例の左下の実を切っておいたので見ていただけたと思う。

黒い種は堅くてよく跳ねるので、正月の羽根つきの羽根の重しにされた。病気を運んでくる蚊を食べてくれるトンボにみたてた羽根には、子供が病気を患わないようにとの願いがこめられている。

この貴重な無患子の枝が品良く引き立つ器として、漆器を選んだ。枝を挿すと、朱色の宝袋からぼんぼんと珠が飛び出しているように見える。艶やかさと瑞々しい生命力を感じさせてくれる藪椿は、飛び跳ねて遊ぶ子供達を見守るお母さん。

花器 朱塗花器

◆横から見た、いけばなの奥行き。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2016 年
12 月号
No.642

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





アロエ「不夜城」

△表紙の花▽

仙溪

花材 アロエ・不夜城（百合科）

アマリリス（彼岸花科）

枯紫陽花（紫陽花科）

花器 陶花瓶（宇野仁松作）

アロエの園芸品種の一つアロエ・ノビリスが不夜城と呼ばれている。キダチアロエが交配の親になっているそうだ。

キダチアロエはかつて「医者いらず」と呼ばれて、怪我や火傷の民間薬として重宝な植物であった。私も子供の頃、外でころんで擦り剥いた傷を治してもらったことがあるが、そんな利用法を知っている人も少なくなってきた。

作例のアロエは葉がぐにやりと曲がっていたのでその動きを生かした。鉢から切るのは勇気が要るので、ここ一番という時に、その価値に相応しい花材をとり合わせていきたい。

大輪深紅のアマリリスで温かみと優しさを加え、少し青みの残る枯紫陽花が両者のつなぎ役になってくれた。花器はどこか西洋的な雰囲気を感じる宇野仁松作の花瓶を選んだ。枯紫陽花とアロエの根の色が器と同化して不思議な一体感を感じる花になった。



桐と梅擬と寒菊

△2頁の花▽

仙溪

花材

桐（桐科）

梅擬（うめご 薔木科）

寒菊（菊科）

花器

紅彩釉花器（宇野仁松作）

ざっくりとした季節の投入。

大きな口の器にたっぷりの水を入れ、あまり背が高くないように、奥行きのある花型に二種の枝を留めてゆく。桐も梅擬も葉が無いので葉の茂った花を添える。ここは敢えて寒菊を選び、黄色い蕾と赤い実を引き立てた。

黄金の舟形花器

△3頁の花▽

櫻子

花材

ネリネ（彼岸花科）

槍鶏頭（やりけいとう 苧科）

ドラセナ（りゅうぜつたん 竜舌蘭科）

花器 金彩舟形花器

この舟形の器は両親がニューヨークで買ってきたもので、「花ふたり旅」にも使われている。金箔で装飾が施された煌びやかな器だ。軽い器なので重たい花材は似合わない。白いネリネと槍鶏頭、赤い縁取りのドラセナを膨らみのある扇型にいかしてみた。

12月は赤と白の組み合わせをモダンにしたい。そんな時の為の器を普段から見つけておきたい。



スターリンジア

桜子

花材 スターリンジア(フトモモ科)

ガーベラ2色(菊科)

ステンレス玉

花器 赤色ガラス鉢

この白い小さな玉はスターリンジアといい、オーストラリア原産のフトモモ科の植物だ。フトモモ科といえばユーカリが思い浮かぶが、他にもワックスフラワー、ブラシノキ、それにゲアバ、フエイジョアといった果樹などもフトモモ科の植物と覚えておきたい。

スターリンジアは赤や青に染められたドライフラワーのこともあるが、生の切り枝はじめていた。細い銀色にも見える毛が球形に生えて可愛らしい。赤と白のガーベラの鉢を見つけたので、鉢から土ごとはずしてビニールで包み、そのまま花器に入れて使った。毎朝少量の水を土に染み込ませて、長く飾っておけた。

横から見た奥行き



立華時勢粧りつかいまようすがたを読む ②9

立花秘傳抄 一

常磐木之部（つづき）

晒木しやれ

非祝言。上中下。

晒木を用いる木八つあり。楓かえで、柳、松、檜

梅擬（ほそき晒を用いる）、栢かしわ（同上）、梅（口伝）、円栢いんけき。

晒木は高山の太木、しかもその性かたく齡よひ久しき物は、かならず木ずえ晒木となるなり。凡およそ晒木に生を付けんと思わば、必ずまず出生を見立て、それぞれに能く相応したるを專一とす。

楓かえで、松、檜、円栢、右の四木は高山出生の物

なれば、白くよく晒て景氣異曲にするどなるを用うべきなり。

梅擬、栢はさのみ高山の物ならねば、白く晒するどなるはうつらず。枝ほそくすなおなるを

用うべき。此のさかいよくよく工夫なして立つべきものなり。

柳は幽谷岸上ゆうこくがんじょうに生える物なるゆえ、白くきれ

いに枝くるいたるはうつらず。朽木くちきの柳といえは、やわからに朽ちたるごとくなるをよしとす（口伝）。

梅のしやは太きを嫌ず。ところどころ苔の付てやわらかなるは景氣よくうつる物なり。是一つの習いなり。

晒木は古法に水際にて見する事を嫌うといえども、立て様にてくるしからず。

苔

非祝言。上中下。多識に云う、百蕊草ななきこけ、艾よつ

納こけ。日本私記、蘿こけ、蘚こけ。和名、日影草（木の

苔未詳）

堀川百首

よこね島下葉におふるさかり苔露かからね

ばかわくまもなし

新千冬

みどりなる苔のむす木も白妙の雪ふりにけ

り天のかぐ山

古来祝言の花に苔を遣うといえど今様は是を用いず。自然と葉の付きたる木に苔の付たるは用うべきか。枯れて葉もなく朽くちて枝もなき木に、苔の付たるを祝言とはいいがたし。立花制法の言葉にいう、祝言の花に嫌うべき物、すえのとまりたる物、枯れたる枝、この言葉顕然けんぜんなり。和名に日陰草とあれば目出度き物なりと云えり。大に笑うべし。さざれ石の巖いわとなりて苔のむすまでと読めるはあれども、木に付たる苔を祝儀に読める証歌ありや覺束なし。されば極真立の花に苔を用いざることを、是祝言にあらずる道理必然なり。

苔こけ木祝言にあらずといえど、松の一世には遣うて苦しからざる、口伝あり。ある師の云う、たとえば貴人高位の御祝に饗膳きやうぜんを奉るに干したる魚、死したる鳥、そのかたちながらも奉たてまつると

いへど、御祝いの大本にひかれて不祝儀とは云いがたし。松の一色もかくのごとし。松は祝言第一の物、その上余木をまじえず立てる時はこれ極々の祝儀なる故、苔をまじえても苦しからずと云えり。しかれどもすこしづつのあしらいに遣いて七つの大枝に遣うことなし。この説の外口伝あり。

追善の立花に苔晒木を立てざる流もあり。又立てる流もあり。その立てざると云う道理いかにと尋ねるに、返答まちまちなれども正理に叶わざるによりて爰に略す。師伝に云わく、百年ないし二、三百年の追善の立花には、必ず松などの老いたる苔晒木の年ふりたる気色を瓶にうつすべしと云えり。然るにこの教えの心を取りちがえて新仏の追善には苔晒木を立てざると心得たるものか。苔晒木は立花第一の莊嚴と見る時はさのみ嫌うべきにあらず。

苔晒木を遣うに習いあり。たとえば人の子を養つて我が子と見るように育てる心をもって指

すべしと云えり。されば鎌倉の栢樹に熊野の晒木、その生所万里へだつといへど瓶上に立て合わするに体用和合して一木の景氣をなす。これ立花の妙にあらずや。初心巧者によらずこのさかいをよくよく工夫して上手になるべし。花道の楽とするところこれより外はなし。

「御祝いの席では、生きた木に自然に苔がついているものは良いが、枯木の苔は相応しくない。極真立にも苔木は用いない。又、松一色にはあしらいに使つてよい。」と書かれている。今はあまりこだわらずに使うが、心得ておきたい。

鎌倉の伊吹に、遠く離れた熊野の晒木を立て合わせて一木の景色をつくる。そんなところに花道の楽しさがあるとも述べている。

この後、苔木晒木の解説はまだ続くが、「立花時勢粧・中」より一株砂物の図を紹介しておく。初版では富春軒作となっている。梅の苔と松の晒が花形の要になっている。

※参考文献

『いけばな美術名作集 第三巻 立華時勢粧』

(日本華道社刊)

『花道古書集成 第二期第一巻』

(大日本華道界刊 思文閣出版刊)

※立花図転載

『華道古典名作選集 立華時勢粧』

(思文閣出版刊)



第七十七図

一株砂物 西村松庵(初版では富春軒)
梅 苔 松 晒 水仙 椿 著我 嫩

第31回国民文化祭・

あいち2016

華道フェスティバル

会期 11月1日(火)～6日(日)

会場 名古屋市民ギャラリー栄

(公財) 日本いけばな芸術協会・

役員招待出品 桑原仙溪

花材 サンスベリア・アルボレッツ

センス(竜舌蘭科)

アロエ・不夜城(百合科)

アンスリウム(里芋科)

アンスリウムの枯葉

花器 陶大壺(近藤豊作)

今号の表紙と裏表紙の花材を名古屋での花展に出品した。どちらも葉先が尖っているので扱いに難儀したが、近藤豊さんのどっしりした器がしっかりと受け止めてくれた。

会期中「琳派400年、花遊びの

系譜」「いけばなの未来」をテーマに記念講演会・シンポジウムがあった。

合間を縫って徳川美術館へ行ってみたが、解説が分かりやすく、江戸時代の武家文化を垣間見ることが出来た。中でも鼓箱のお囃しと舞のデザインが秀逸でしばし見入ってしまった。私にとって貴重な出逢い。

(写真①②)





立花時勢粧の水仙一色立花

仙溪

花型 水仙一色立花 行の草

花材 水仙(彼岸花科)

寒菊(菊科)

花器 銅立花瓶

撮影 水沢圭介

京都新聞に一年間連載される「華の時代 二条城にいける」のために立てた水仙の立花。背景は二条城二の丸御殿「遠侍」勅使の間に隣接する帳台構。(11月11日(金)夕刊掲載) ぼんやり見える障壁画は菊である。狩野甚之丞(永徳の甥)の作とされている。

今回の撮影にあたり、「立花時勢粧 下」にある「水仙一色」3図のうちの一つを模してみることにした。絵の中の葉が立体としてどこへ出ているのか想像しながらだったが、まさに「自由」を得た人の表現だなと感じた。

教わった花型にいけることはいつかできる。その先の「自由自在」な花を目指そう。



立花時勢粧より



赤芽柳

仙溪

花型 生花 草型 留流し
花材 赤芽柳（柳科）
花器 煤竹竹筒

赤芽柳15本の生花。赤芽柳は日の当たる側と裏側とでは枝の色が違う。いけ終えた時に飴色の木肌がすべてこちらをむいてくれると、全体が一体になって美しい。
作例は枝の捌きに乱れが残るが、多少目をつむって花型の参考に掲載しておく。

横から見た奥行き



東寺・灌頂院
夜叉神立像 献花
這柏楨の生花

仙溪

花型 生花 草型 副流し
花材 這柏楨（檜科）
花器 銅薄端

弘法大師空海が彫ったと伝わる夜



流慶専原
桑原仙英



ねこちぐら

去年の冬に戴いたねこちぐら。レモンちゃんは寒くなるとねこちぐらの中で丸まっていることが多い。お気に入りのマイホーム。

又神立像（阿形と呼形）の特別公開にあわせて、京都いけばな協会から10名が献花のいけばな展をさせていただいた。私は両像の間に居られた不動明王立像（平安時代）の横に、ハイビヤクシンを銅器にかけた。

私ははじめて夜叉神像を拜んだが、普段はそれぞれ専用のお堂に居られるので、格子の間から拝まれる方も多いと聞く。歯痛を治して下さるとも。

夜叉神様の全身は蜂の巣穴が開いて痛々しい。それでもなお見る者に不思議な力を与えて下さる。照明に浮かぶお顔は、想像していたよりずっと優しい印象。周囲のいけばなを喜んで下さっているようだった。



サンスベリア・ アルボレッセンス

仙溪

花材 サンスベリア・アルボレッ
センス（竜舌蘭科）
アンズリウム（里芋科）
花器 陶大壺（近藤豊作）

この観葉植物はサンスベリアの仲間
で、硬い緑色の葉の先端が鋭く
尖っている。アルボレッセンスとは
「木のような」とか「木の性質をもつ
た」という意味だそうだ。いわゆる
「木立サンスベリア」である。名古
屋の花展で、同じ器に立てていた
（8頁）ので合わせてご覧いただき
たい。花茎の枯れたものがでていた
ので傷めないように大事に残して撮
影した。朽ちた物の持つ自然味が加
わると、植物の経てきた時間に思い
を巡らせられる。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2017 年
12 月号
No.654

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





カンガルーポー

△2頁の花▽

桜子

花材 カンガルーポー2種

(ハエモドルム科)

薔薇(薔薇科)

花器 陶製鍋(林聡江作)

見れば見るほど不思議な花。先が6つに裂けていて、細い毛に覆われた筒状の花を咲かせるが、カンガルーの前足(ポー)に確かに似ているような気がする。カンガルーを近くで見た事がないので、なんともいえないが。

オーストラリア原産のハエモドルム科だが、ハエモドルムとは「血の贈り物」という意味。昔からオーストラリアの人達が、赤い地下茎を食用にしていたからという。花色は黄色だけではなく、赤、黒、オレンジ、紫と多彩だ。今回はピンクシルバーも混ぜてみた。土鍋にいて暖かな雰囲気。



横から見た奥行き



汽車ポツポ

〈3頁の花〉

櫻子

花材

ヒペリカム（弟切草科）
アルストロメリア

（アルストロメリア科）
小菊（菊科）

ダリア（菊科）

花器 陶製機関車

「長らく流誌に続けてきた『ホッホチャンとケンチャン』は、素子と孫の健一郎の会話から生まれた、いわば『花遊び』のスケッチである。そして、その『花遊び』を通じて、いけばなに深い関心を持つてもらいたかったのである。」と父が本の序文に書いている。健ちゃんも21才になった。お友達を相手に先日初めての稽古をしていたが、いけばなへの興味が深まってきたようだ。子供のためにいける花。そんな気持ちで焼き物の機関車に花をいけた。シュッポシュッポと、童心に帰って、心は野山を駆け巡る。



横から見た奥行き

ロイヤルマツカム

〈表紙の花〉

仙溪

花材

躑躅（躑躅科）
水仙（彼岸花科）

小菊（菊科）

花器 陶花器

（ロイヤルマツカム窯）

仙齋&素子の「花ふたり旅 オランダ編で、「野道のお地蔵さんに供えた花のよう」と父が書いているが、牧場の柵に縄で括りつけていたのはこの花器である。デルフト陶器の工房の一つ、マツカム窯で作られたものは、現在ロイヤルマツカムと呼ばれる。

時々、稽古場の柵に飾っているが、和室の雰囲気にも程良く調和してくれる。日本の伊万里を真似て絵付けがなされた歴史を持つからかもしれない。マツカム窯の歴史は古く、1572年創業だそうだ。はじめて和花をいけてみたが、優しく受け止めてくれた。初冬の仄かな緊張感が心地よい。



横から見た奥行き



シンフォリカルポス

桜子

花材 シンフォリカルポス(忍冬科)

ユーカリの蕾(フトモモ科)

デンファレ(蘭科)

ミリオクラダス(百合科)

花器 鹿耳ワインクーラー

ムラサキシキブの実かな?と思うほど似ているが、実が密集してブドウのように固まって付いている。これは北アメリカ原産スイカズラ科のシンフォリカルポスという名前の木だ。寒冷地でも暖地でも良く育つので最近よく見るようになってきた。白い実の改良種もあるが、ワインレッド色は原種に近いらしい。葉が付いていても取り去ってつけた方がいい。ミリオクラダスのようなたつぷりの緑を添える事で艶やかな姿になる。

グレーの実に似ているのはユーカリ



横から見た奥行き

リ・グロボラスベリーの花の蕾。どちらも弧を描く姿が綺麗で取り混ぜていけてみた。白いデンファレを足元に挿して、これもクリスマスに飾るうかな。

カラフルないけばな展

桜子

①
小学校の音楽教師をされている鈴木慶由さんが、京都市の子供教室案内を利用して、月一回のこどもいけばな教室(毎月申込制)を始めて9年目になる。その初めての発表会に全面的に協力させていただいた。小さくてもカラフルでセンスの良い花会になった。きつといつまでも皆の記憶に残ることと思う。





レモン師匠
床の間を拝見するレモン師匠。
稽古中に集まってお軸の絵の説明をしていたら、いつの間にか特等席に座って、一緒に話を聞いていました。いつになく姿勢もよいような。

京都新聞10月21日(土)朝刊・京の彩時記「道を究める」に櫻子副家元のことを紹介されました。(車の広告企画連載として)

2017年(平成29年)10月21日 土曜日

京の彩時記

10 (全面広告)

京の彩時記

道を究める

①

全稿 発行 京都新聞COM

いけばなの魅力は
花を通して四季を感じ
花との対話を楽しむ心の豊かさ。

桑原 櫻子 京都府京都市東山区
京都府京都市東山区にある、伝統的な花道教室。先生は、花道を通じて、四季を感じ、花との対話を楽しむ心の豊かさを感じてほしいと、生徒たちに伝えている。

いけばなは、花の持つ美しさを、人の心に届けるための芸術。花の持つ生命力を、人の心に届けるための芸術。花の持つ生命力を、人の心に届けるための芸術。

いけばなは、花の持つ美しさを、人の心に届けるための芸術。花の持つ生命力を、人の心に届けるための芸術。花の持つ生命力を、人の心に届けるための芸術。

立華時勢粧りつかいまようすがたを読む ④〇

立花秘傳抄 二

実之部 (つづき)

藜蘆おもと

祝言。葱苒そうぜん、葱炎そうえん、老母草おもと(藻塩そうえんに有り)。

老母草おもとは前置ばかりに用いて、外に遣うことなし。花道第一の秘伝の物なり。

おもとに指し合わせぬ物。草木の実のたぐい。同広葉のたぐい。著莪、水仙、くまざさ。

葉数七枚九枚、もしくは十一枚、半はんに遣う。常のことなり。又六枚八枚十枚、調ちように遣うても苦しからず。口伝。

おもとの実一つを一株立てという。二つを二株と云う。葉つかいその外、秘伝あり。師範なくては立つべからず。凡およそその姿ばかりを云う時は、葉組しまりたるは幽玄ならず。ゆるやか

なる時は、くだけて勢いなし。緩からず急ならず。そのさかいに至りては、輪扁りんぺんか輪たるべし。たとえまた伝受したりとも、執行未熟の人ならば、出生玄妙の所、瓶上にいかでかうつさんや。

※前号の訂正〓 (7頁) 燈籠草はとうづき

第八十七図

立花 柳除真 おもと前置

富春軒

柳 梅 柘植 苔 嫩 檜 万年青



ある師の云う。古代はおもとの前置、懇望度々におよびて立てるといへど、座席をえらび、床にあらざれば指さず。立てる所へ人の来る事をゆるさず。花立てしまい水打ちて、あるいは客亭主より外、見することなし。その後前置をあけて花台の上におき、花形ばかりを残して、扱あまねく見する、これ古法なり。誠に花道を重んじ、そのつたえの大切なることこの如し。近代は茶会の花ともいわず、相伝なき人も妄りにこれをさす。道おろそかにするのいたり、なげかしき事なり。

通用物之部 附目録

竹	笹	牡丹
藤	小しだ	萩
酢・ やまゆき	庭桜	粉団花 てまりのはな
小てまり	米柳	小米花
黄梅 おうばい	連翹 れんぎょう	種紫 むらさき
つる水木	えびついでら	仙蓼 せんりょう
きじの尾	下野	葱 しのか
矢筈 やはづ	磐梨 いはなし	がんそく

白丁花 はくちようげ 薔薇 しょうび 磐櫓葉
ひとつ葉 れいし 荔枝

通用物とは出生木にあらず、草にあらざる物なり。竹まず通用の第一なり。藤これに次ぐ。(本草につるの部に入り、歌事に草の部に入る)。つる水木、連翹のたぐいも又同じ。その茎、木にして木にあらざるは南天、牡丹のたぐいなり。茎草のごとくして冬枯れせざるは山吹、庭桜の類なり。常に山木に生え混じりて、野に生えざるは小羊歯、一つ葉のたぐいなり。たとい末代に珍しき草木出たりとも、右の理をもつて立花に用いるものなり。

立花の上には木を山と見なし、草を野と詠め、木は木につづき、草は草につづきて、縁の切れざるを第一とす。十三ヶ条法度に云う。草にて木を包み、木にて草をつつむと。然るに通用の徳たること、木と木との間に立てる時は木となり、草と草との中に立てれば草となる。これ重宝の物なり。

「実の部」の最後は花道第一の秘伝のもの、万年青について書かれている。万年青のある立花図は3つあり、そのうち2つは桜一色の前置になっている。もう1つは「立花時勢粧・下・秘曲の図」の中の「おもと前置」と名がついた第八十七図である。

万年青には実の類、広葉の類を一緒に使わないこと。著莪、水仙、熊笹もだめと書かれているが、これらは万年青に対する敬意の表れである。桜一色のところにも同じようなことが書かれていて、桜や万年青を扱う時の心構えとして知っておきたい。

第八十七図では枝垂柳、紅白の梅、柘植で主な役枝をつくり、正真とあしらいに紅い若葉と檜葉が見える。落ちついた風格の中にも命の鼓動を感じる。その命の大本のように万年青が水際に座っている。そんな印象の立花である。

ここでは藜蘆の字が使われているが、中国名の万年青が使われるのはもう少し後になる。老母草もあるほどと思う名前だ。

さて花材解説は次に「通用物の部」に入る。

「立花の上には木を山と見なし、草を野と詠め」

「木は木につづき、草は草につづきて、縁の切れざるを第一とす」とあるように、木と草によって山と野の景色をつくるようにするのが、山の景色にも、野の景色にも使うことができる花材が「通用物」であり、ある時は木になり、ある時は草となつて、どちらにも使える重宝なものとしている。



ヒムロスギ

仙溪

花材 姫榿杉ひめろすぎ ひのき（檜科）

ガーベラあからな（菊科）

ストックあからな（油菜科）

花器 陶花器（前田安徳作）

クリスマスシーズンに出来るヒムロスギ。花屋ではサツマシギの名前がついているが正しい名前覚えておきたい。スギと名がつくがサワラの園芸品種で自然分布はない。漢字では姫榿杉あるいは檜榿杉。

灰色がかった葉のふわふわした優しい手触りが気に入っている。相手はアマリスやガーベラなどのはつきりとした色と形の花がいい。そして赤い敷物。見つけた時には是非とも手に入れておきたい。

心温まるクリスマスを！。



横から見た奥行き



赤い実と紅葉の立花

仙溪

花型 立花

花材 雪柳(薔薇科)

梅擬(繡の木科)

伊吹(檜科)

木母(薔薇科)

糸菊2種(菊科)

二輪菊2種(菊科)

花器 陶花器

園芸種の梅擬は枝が短くて実が大きい。伸びやかさに欠けるので、紅葉した雪柳で自然味を補った。

立てて一週間たったところで撮影したが、菊が大きく開いて華やかな秋色の立花になった。



横から見た奥行き



水仙と小菊の株分け

仙溪

花型 生花 株分け

花材 水仙 (彼岸花科)

小菊 (菊科)

花器 三島陶鉢

絵の画題で「歳寒三友」とは、松・竹・梅、もしくは梅・水仙・竹である。どれも冬の寒さに耐える植物で、節操を曲げない士人の精神を象徴する意味がこめられている。士人とは高い教養と徳を備えた人のこと。

水仙は凛とした姿にしたい。5本のうち花は真・胴・留に低く入れている。



横から見た奥行き



ロウヤガキ

仙溪

花材 老翁柿（柿の木科）

菊「色自慢」（菊科）

スプレー菊（菊科）

花器 陶花瓶

ロウヤガキの立派な枝が売られていたので、菊と投入してみた。これでも小振りな枝を選んだのだが、花器がひつくりかえりそうなくらい重みがある。長く垂れる枝を上の方から出すために仕掛けを工夫している。

艶やかな花器の質感にロウヤガキの照りがよく似合う。橙色のスプレーギクが実の色に明るさを添え、赤紫色の新種の菊が全体の色彩に鮮やかさを加えてくれた。

ロウヤガキは中国原産で老鴉柿とも書く。別名を衝羽根柿。このロウヤガキには鋭い棘があつたが、いける際には注意したい。



横から見た奥行き

いけばな

桑原専慶流

テキスト

2018 年

12 月号

No.666

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





異国の雰囲気

△表紙の花▽ 櫻子

花材 黒色カラー（さしいも） 櫻子

木母（きいち）（薔薇科）
薔薇（ばら）（薔薇科）

花器 真鍮銀象嵌深鉢

この真鍮の器は両親が写真集「花ふたり旅」の中のエジプト編で使っている。今回黒いカラーと赤い薔薇を合わせてみたがよく似合う。不思議な異国の雰囲気とする。銀象嵌の模様がよい。手間を掛けて作られた器だ。両親の思い出と共に大切な器の一つだ。



横から見た奥行き

フエゴという名の菊

△2頁の花▽ 仙溪

花材 寒桜（薔薇科）

菊（きく）（菊科）
小菊（こきく）（菊科）

花器 陶コンポート

この大輪菊の名前は「フエゴ」。赤と黄色のコンビネーションが見事だ。花も葉も強くて美しい。花付き



横から見た奥行き

この器も「花ふたり旅」のもの。
オランダ編で登場するデルフト花瓶だ。旅先で器と花を調達し、風景の中に置いて撮影する。大変なエネルギーが必要だが両親はそんな旅を4度繰り返し続けた。お陰で花器の選択肢が増えたので、こんなけばなも生まれる。

花器 デルフト花瓶

磯菊(菊科)

胡蝶蘭(蘭科)

花材 メラレウカ(フトモモ科)

ハ3頁の花 ヨモギ

メラレウカ



横から見た奥行き

のいい寒桜を合わせると、互いに補い合い引き立て合ってくれた。



山茱萸の実 さんしゅゆ

仙溪

花型 草型 副流し
花材 山茱萸（水木科）
花器 銅花器

この山茱萸は名古屋の生徒さんが切ってきて下さった枝だ。大きな束を抱えて新幹線に乗って。葉がいっぱい付いていたのを元氣そうな2枚だけにした。こないけ方ができるのも生徒さんのお蔭だ。たわわに付いた赤い実が美しい。

横から見た奥行き



レモン日より

ときどき生徒さんをお迎えしてくれています。ときどきです。



立花秘傳抄 三

草之部 (つづき)

葦あし

祝言。上中より下まで用いる。

初めて生ずるを葎かと云う。蘆ろは未いまだ秀ひいでざるを云う、成長したるを葦つぐもあしという。花を蓬ほう蓊うと云う。

和名、氷室葦。なには草。さされ草。

古歌

難波にはあしというなるひむろ草代々の
ためしにかかる葉もなし

芦は出生直なる物なれど、除心に用いる時はふとき針がねを通してたむるなり。請、副には大ように葉の茂りたる物、又みきくるとる物など取り合いよし。心の出し所、著我、檜扇の陰よりやわらかに出したる景気面白し。



第七十八図
二株砂物 芦真
谷久兵衛
芦 松 晒木 苔
杜若 夏はぜ 熊笹
柘植 檜扇 竜胆

芦の心は風をもちたる景色あらば、瓶にのせざるもおかし。葉長くしおれたらば断ちつくろい、又しだれたらば竹針にて茎へとちつけてよし。

芦は出生しげき物なれば、二本三本を以て心とす。上より遣いくだしては流枝にも用いる。或る人の云わく、芦は流枝までは下げ用いずと、然れども出生水辺の物なれば、当代専ら流枝に用いる。

古歌

あさき江にねはあらわれて流れ芦のしほのみちひにたよりまちける

芦をたむれば茎くだくる物なり。その上を紙にて巻き、さいさい水をかけざれば、はやくしほるるなり。

蒲がま

祝言。上中。

香蒲たけのこと云い、筍ほしやくを蒲弱ほわくと名づく。花の上の黄粉ほわうを蒲黄ほわうと名づけ、又蒲槌ほつちという。

和名、花かつみ。

古歌

東路やいかほの沼のはなかつみかつみし
人に恋やわたらん



第五十八回

立花 蒲除真

十二屋善兵衛

蒲 夏はぜ 松 苔 杜若 柘植

桔梗 熊笹 著我

蒲は先に勢いなきにより流枝に用いず。

葉遣い^{すすき}薄に同じ。茎に付きたる葉を以て思うように使うべし。なびきあしき時は小刀のむねを以て、しごく時は自由に^{なび}靡くなり。

つくも

非祝言。上より中まで。

本草綱目、三稜^{さんりょう}。

和名、江浦草^{つぐも}。丸すげ。大蘭ともいえり。

古代用いずといえども、このころこれを立つ。針金を入れて遣うべし。

葦^{あし}、蒲^{がま}、つくもと水辺の植物が続く。

葦は6作で使われ、その内4作は葦の真^{しん}である。第76図は半ば朽ちかけた松の陰から葦や杜若^{かきつばた}が生えていいる。葦と松が片方へ長く伸び広がるのを、太い晒木とぐいっと曲がった太い松でバランスをとっている。もはやどれが請でどれが流枝といったことではなく、自由で絶妙な調和がある。

蒲は2作で使われている。第56図は蒲の真^{しん}。蒲の葉が上方で伸び広がっているので、他の役所は変化を抑えているが控枝の苔木にこぶしをきかせている。

第36図は二株砂物でつくも（太蘭^{ふとらん}）の真^{しん}である。現在では真つ直ぐな印象のつくもだが、自然に曲がったものを採取して立てたものと思われる。

※参考文献

『いけばな美術名作集 第三巻 立華時勢粧』

『花道古書集成 第一期第二巻』

※立花図転載

『華道古典名作選集 立華時勢粧』

第三十六図

二株砂物 太蘭真

富春軒

太蘭 芍薬 松 晒木 杜若 小菊
著我 嫩





万年青 九葉一果

仙溪

花型 行型

花材 万年青 (百合科)

花器 三つ脚青磁水盤

正月花の参考に。葉のふちに白い斑の入る都城と呼ばれる品種。このような大葉系のオモトは薩摩地方が発祥の地とされるので薩摩万年青と呼ばれている。赤い実の茎には割り箸を添えて固定しフローラルテープで巻いておく。

横から見た奥行き





水仙一色立花 仙溪

花型 水仙一色 直真立すくしんて
 花材 10頁 水仙 小菊 著莪
 11頁 水仙 寒菊
 花器 陶花器・銅花器

「立花時勢粧」の絵図をもとに水仙一色立花を立てた（10頁の花）。葉先まで針金を通して絵図と同じ形にしてみたが、かなり自由奔放な姿である。ただこれは模倣であって立花本来の目指すものではない。流祖の富春軒仙溪も「立花秘傳抄」で水仙の葉には針金を通さず、細い竹串で出口を繞めるのみと戒めている。すなわち絵図の流麗な葉の動きは元々自然に備わったもので、人工的に形をつけたわけではないのだ。とはいえ私達の手に入る水仙は素



積雪の後で捻れながら逞しく育つ水仙。淡路島の黒岩水仙郷にて。

横から見た奥行き（10頁の花）





横から見た奥行き（11頁の花）

直なものばかりなので、そういう水仙本来の姿を立てると11頁のようになるがこれはこれで良さがある。
立ててから運ぶのには葉先まで針金が入っていると安心なのだが、出口から先は針金を通さずに自然の姿を生かすようにするべきだろう。いつか水仙郷で見たようなくせのある水仙で、流祖のように立ててみたい。



出逢い花（34） 櫻子

満天星（躑躅科）
どうたんつじ

椿（椿科）

花器 瑠璃色結晶釉花瓶

（前田五雲作）

花器の瑠璃色にドウダンツツジの紅葉が映える。

この器は高さ20センチの小さな花瓶なのだが、2種の小枝を挿しただけで、素敵ないけばなになってくれた。

この出逢い花の要はなんといつてもツバキの花だ。これから春にかけて様々な種類のツバキが咲くだろう。小さな枝でいいので、いけて飾りたくなる。一種でいけるのもいいが、また新しい出逢いを楽しみたい。

横から見た奥行き



いけばな

桑原専慶流

テキスト

2019 年

12 月号

No.678

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





月桃の実のいけばなとお茶

△表紙の花▽ 櫻子

花材 月桃の実（生薑科）

薔薇（薔薇科）

花器 デルフト花瓶

沖縄から来た月桃の実。夏には可愛いキャンディの様な実になるので、稽古花材として良く使う様になった。緑、黄、オレンジ、赤と色づいて最後は薄茶色の実となる。沖縄ではとても身近なショウガ科の植物で生活の一部として使われる。葉は抗菌効果があるので食物を包んだり、乾燥させて虫除けにも。花は桃の実のように可憐だが中々いける事は出来ない。その花の蒸留水は化粧水にもなる。

寒い日の夜、月桃のハーブティは身体を温めてくれる。ワインよりもポリフェノールが多くノンカフェイン。乾燥した実を5分ほど煮出して、ピリッとしたエキゾチックなお茶。



南天とピンポン菊

△2頁の花▽ 仙溪

花材 南天（目木科）

ピンポン菊（菊科）

花器 方形陶花瓶（宮下善爾作）

木枯らしに身を震わせる頃、南天の赤い実を見ると、なんとなく勇気づけられる。寒さもへっちゃらな濃緑の葉をぎりつと広げた姿は粋である。白とピンクの手鞠のような菊を取り合わせると、新鮮な感覚のいけばなになった。

バラの実「センセーショナル・ファンタジー」

△3頁の花▽ 櫻子

花材 メラレウカ（フトモモ科）

薔薇の実（薔薇科）

ダリア（菊科）

花器 ガラス花瓶（フィンランド）

バラの実「センセーショナルファンタジー」は一重の濃いピンクの花が咲いた後の実を鑑賞するためにつくられた品種だそう。樹勢が強いので栽培しやすく、今後出荷も増えてくるだろう。長く飾ったあとドライにしてさらに楽しむ。

実の足元に黄色のメラレウカをたっぷり加え、同色のダリアを覗かせた。赤い器にいけると実たちが元気に飛び跳ねて見える。喜んでくれているようだ。



山茶花の生花

△ 4 頁の花 V 健一郎

花型 生花 行型
 花材 山茶花 (椿科)
 花器 煤竹竹筒

中庭に植わっている山茶花とはもう長い付き合いだ。今年も少し遅かったが咲いてくれている。小学4年生の頃から家元宅に住まわしてもらっているが、年々目の合う回数が増えてきた。一度意識してしまうと何度も見てしまう。

幼い頃は、祖父が入った後の熱すぎる湯に浸かり火照った身体を冷ますうと蔵の前に腰をかけ、明るすぎる夜空と中庭を見て過していた。湯冷めし風邪をひくこともあったが本当に好きな時間だった。熱すぎるお湯につかる事が身体にとって良くないことも知り、湯冷めをしたら風邪をひくことも学習したが、気がつくとな好きな時間が無くなっていた。今は日の出ている時間みる葉の陰りがとても綺麗に思える。

横から見た奥行き



平安神宮献花祭

老爺柿の投入

花材 老爺柿（柿の木科）

臙脂色ピンポン菊（菊科）
薄紅色糸菊（菊科）

花器 黄色糸菊（菊科）
柿色陶壺

ロウヤガキは中国原産の渋柿の一種で、実が黒く熟すのを鴉になぞらえて老爺柿と呼ばれ、やがて老爺柿に。ツクバネガキとも呼ぶ。

老爺柿の生花

花材 老爺柿（柿の木科）

山茶花（椿科）
花器 銅花瓶

ロウヤガキの切り枝は高価だが小さな実が愛らしく、実がたわわに生った大きな柿の木を遠目に眺めているような風情がある。ロウヤガキには先が鋭く尖った小枝があるので怪我をしないように注意。



立花時勢粧の器 ②

「立花時勢粧」の立花図に描かれている立花瓶・砂鉢は96種類ある。前号につづき「耳」に注目してみよう。

図① 象

一番最初の「真の花形」の器。第七十九図・第八十図の「真の対の花」にも使われている（テキスト615）。

図② 象

この象は鼻の形が特徴的。「立花時勢粧」には象の意匠の

器が6種類ある。

図③ 龍

この図は富春軒による「除真の内草の花形」である。他にも第九十九図・第一百十図の松一色の立花（どちらも富春軒作）に使われている（テキスト636）。富春軒

にとって特別な器の一つといえる。

図④ 龍

図⑤ 獅子

第八十四図（テキスト615）と共に「草の対の花」に對で使われている。

図⑥ 唐子

図⑦ 巻葉（蓮？）

図⑧ 竹

図⑨ 竹

図⑩ 竹

⑧⑨⑩図はどれも真が松の立花だが、それぞれに個性的な松なので見比べると面白い。



第一図 テキスト No.612・633に掲載



第六十図 テキスト No.661



第二十四図 テキスト No.640



第五十九図 テキスト No.674



第二十一図 テキスト No.625



第八図 テキスト No.613



第五十八図 テキスト No.669



第十二図 テキスト No.622



第八十三図 テキスト No.615・637



第四十一図 テキスト No.641

卒業旅行 パリ・ベネチア

健一郎

ベネチア（英語ではベニス）での3日目の朝、ドラキュラのメイクをした中学生ぐらいの1人の男の子とすれ違った。アカデミア橋の上でマントをたなびかせ登校している。ああ、今日はハロウィーンか。特に何をするわけでも無く予定通りの時間を過ごす。目的地に着くまでに大勢の学生とすれ違うが、仮装をしているのは彼だけだった。どうも彼は強い心臓を持っているみたいだ。

確か去年のハロウィーンは私の一つ年下の弟の順之助が高校にキヤラクターものの着ぐるみをきてバイクで学校に行っていた。渋谷は仮装人たちが溢れかえっているそうだが単身で仮装をしている成人男性は京都ではみかけない。気が盛り上がって後悔してはいけないのだが。あの後学校でどうなったのか聞くのを忘れていた。

昔からのだが、私の弟は少し変わっている。みんなが右を向いているときに必死に左を注視しているようなやつだった。端的にいえば変わり者である。本人はその他大勢と同じく右を向きたいらしく日々必死に努力をしている。左を向くようそののかしてみても効果はなかった。順之助が小学生のころ発表会に出すた

めに描いた、星月夜に羽ばたくコウモリの絵は私のお気に入りである。

実際に発表会に足を運んだ母によると、小学生らしいたくさん色を使い、キラキラした絵を描く中に明らかに一つだけ暗い絵がありそれが息子の絵でショックだったと言っていた。彼は決して先生に描かされて絵を描いた事は無かった。周りを見て合わせようとするところはならないはずだ。周りが見えなくなるほどに一つの事だけに集中すると今までその人が経験した感覚が研ぎ澄まされ、その個人の特徴を持つようになる。今でもたまに鉛筆で描いているのを見かけるが周囲の顔色を伺うことを覚えた順之助は大衆漫画の模写ばかりである。

芸術家は大衆の模倣をした途端に埋没してしまう。オリジナリティーの有無を論じたいのでは無い。ただ、いつの世であっても世界を変えてきたのは少数派である事実は明白である。

ベネチアへいく前にパリに寄った。パリにて古典〜近代までの美術を見て周り、ベネチアにて現代の美術を体感すべくこの二都市に絞った。無理をしてこの歳で1人で行っているのは、何度も行き同じ作品と向き合ったときの自分の進捗状況の確認のためでもあるが、抑えきれない好奇心が強く起因している。興味

を持つと止まってはられない。

感性を磨くために美しいものに囲まれ、美の感覚を研ぐ作業をするために日常が日常でなくなる。自分の見る全ての世界を変えるには、自分が変わりさえすればどんなものにもなる。

随分な数の作品を見たが、私的には、賛嘆を強要するような崇高な作品ではなくただ純粹に美しい作品に強く惹かれた。純粹な美しさは私を観想に誘う。

自分と作品を分け隔てる結果がないため、作品の息づかいが聞こえる

ようだった。生き生きとした筆の

タッチ、堂々とした趣、何を一つをとってもそれは非常に人を惹きつける強力な引力を持つのだがその根幹の節々に愛情が感じられた。その愛情は周りまわって憎悪にもなりうるのだが、裸で作品と向き合っているかのような感覚だった。あれほどの作品は偏愛の中からしか生まれえないだろう。決して周囲の顔色を伺ってできる代物ではなかった。

ベネチアビエンナーレの作品をみて回って帰路につく。百人百様に解釈された作品を消化しきれずにいたが、お腹は空く。適当な店でスパゲッ

ティでも食べようと店を覗くと、小さいお化け達が占拠してよく周りをみると、この辺り一帯のお店で

まともに食事ができそうにない。実際に見たのは初めてだったかも知れない。魔女やカボチャに扮した子供達が店という店を一軒一軒丁寧にツアゲするのを目の当たりにするのは、子供が群れて店を襲う姿はなんとも愛らしい。大人数の群れで行動する子供達がキラキラ輝くほどに朝にすれ違ったドラキュラの男の子が色濃く想起される。彼は無事大恥をかいていれば嬉しく思う。



ホテルの近くの運河にて

海運国家として名を馳せたベネチア。複雑な蜘蛛の巣のように張り巡らされた生活の生命線とでも言うべき運河を背景に、ベネチアの特産として有名なムラノガラスにデンファレを生けた。パリのオランジュリー美術館でクロード・モネが取り組んだモチーフを自分なりに咀嚼し表現したものである。



夏櫨の立花

△ 9 頁の花 ▽ 健一郎

花型 除真立花

花材 夏櫨(躑躅科)

七竈(薔薇科)

栗(櫟科)

雪柳(薔薇科)

桔梗(桔梗科)

小菊(菊科)

花器 陶花器

今年のはかき氷は美味しくなかった。きつと冷夏のせいだと思ふ。あまりの寝苦しさは夜中に目を覚ますこともなく、過越しやすい夏が終わった。もう秋である。短い短い秋の到来は年末にむけてドタバタとしていると途端に終わってしまうが、その短い時間で自然も冬に向けての準備で刻一刻と様子を変えるため、毎日の観察が楽しい。

この立花は普段のお稽古のものに比べると大ぶりの立花である。あまりにもしっかりとした夏櫨だったので落とす葉も最低限に抑えた。この荒ぶる夏櫨を七竈が濃い紅葉で請けている。そしてこの役目を終えた葉は散っていく。今年は長い期間、青い葉が手に入る環境だったため例年とは違った違和感を覚える。同じ毎年ではなく毎年少しずつ違う。慣れれば慣れるほどその違いは分からなくなるのかも知れないが、毎日をその時を新鮮に味わう事は大切である。



ツルウメモドキ

仙溪

1985年8月下旬、「新進いけばな作家競作展」に辻田慶敬さんが出品したツルウメモドキの生花は今でも忘れられない。若い実と瑞々しい葉が茂り、3日間来場者を魅了していた。白リンドウを根締めにし、ピンクのデンファレとの二瓶飾りで、ツルウメモドキの葉色が際立っていた。



テキスト265号より

除真立花

〈10頁の花〉 仙溪

花型

除真立花

花材

躑躅(躑躅科)

蔓梅擬(錦木科)

雪柳(薔薇科)

貝塚伊吹(檜科)

二輪菊(菊科)

小菊など5種(菊科)

花器

広口陶花器



稽古で立てた立花を十日後に撮影した。緑色だったツルウメモドキの実が弾け、二輪菊が大きく咲いてきた。請と控枝は紅葉したキイチゴだったがユキヤナギに代え、胴の糸菊も小輪種にさしかえた。あれこれ工夫しながら長く楽しんでいる。



蔓梅擬の生花

△11頁の花▽ 仙溪

花型 生花 草型 副流し
花材 蔓梅擬(錦木科)

小菊(菊科)
花器 煤竹竹筒

柔らかい蔓は途中まで互いにかめたり、別の枝を支えにしたり、ぐるぐる巻き付いたりしている。





啓翁桜の生花

△12頁の花▽ 仙溪

花型 生花 草型 副流し

花材 啓翁桜（薔薇科）

花器 煤竹竹筒

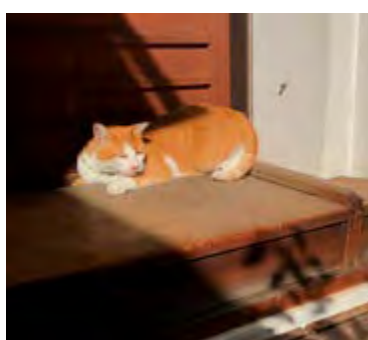
桜は充分に寒さを感じてからでないと開花しない。冬が来るのが早い東北では、12月にお正月用のケイオウザクラが出荷される。

新春に一足早い春を楽しもうと、ケイオウザクラを生花にかけた。部屋の温もりで蕾がふくらんでゆくと、心も温かくなる。



レモン日より

ひなたぼっこ中。



いけばな

桑原専慶流

テキスト

2020 年

12 月号

No. 690

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





クリスマスマス

△2頁の花▽ 健一郎

花材 モミの木（松科）

ブルーアイリス（楡科）

手編みのツリーオーナメント

花器 磁器扁壺

「はなあそび」と題して菜月と遊び心のあるいけばなを楽しんでいる。

今回は菜月の作った手編みのオーナメントを、もみの木に合わせてみた。かぎ針あみに夢中になっていたときに、ものの10分程でこさえてくれた。

素材が変わりデザイン化されたモミの木と北歐風の人形がよく合っている。

三毘（さんこん）

△表紙の花▽ 仙溪

花材 榛（樺）の木科

菊「フエゴダーク」（菊科）

椿「西王母」（椿科）

花器 陶コンポート

「三毘」とは三兄弟という意味があるらしい。

画題に「風月三毘」というのがあり、蓮、菊、蘭が描かれる。また煎茶道では秋に蓮根、菊、春蘭の葉株の盛物を画題物として床脇に飾る。

「風月三毘」を調べてみると、中

国の清の時代の人物の名前、孟蘭、仲蓮、季菊から名付けられたとあったが、もし本当だとすると、自分の子供に、春の蘭、夏の蓮、秋の菊の字をそれぞれ付けるなんて、なんて風流な親だろう。ちょうどそれぞれの季節に生まれたのかな。

いけばなでは3種類の花材でいけることが多い。仲の良い三兄弟のように、互いに助け合い、それぞれも生き生きと見えるようにいけると、なんともいえない良さを感じる。

ハシバミは侘びた風情のある個性的な花材だが、金彩のある土つばい花器を選び、金茶色の大輪菊で温かみを補い、椿の薄紅色の花と葉で艶やかさを加えると、いい雰囲気になった。私なりの風月三毘。



風月三毘の軸と花。いけて十日目。



メラレウカ

△ 3 頁の花 V 櫻子

花材 メラレウカ (フトモモ科)

柏葉紫陽花の葉 (紫陽花科)

ガーベラ (菊科)

花器 ガラス花瓶 (コスタボタ)

メラレウカをいける様になって
6、7年になる。

オーストラリア原産でユーカリと
同じフトモモ科の樹木である。

ティーツリーとも呼ばれるが、最
近では日本でも暖かな場所では育て
られ出荷される様になった。

繊細な黄金色の葉がガーベラを柔
らかく包み込んでくれる。

手で葉を揉むと爽やかで清い香り
がして自然の恵みを感じる。

飾る場所が清潔な空間になる様な
気がする。

今年はお稽古で何度もいけさせて
もらえたが、紅葉した木苺や雪柳の
ように、秋を彩る身近な花材となる
ようで嬉しい。





菊一色

△ 4頁の花▽ 健一郎

花型 立花 菊一色 除真のきし

花材 糸菊（菊科）

小菊（菊科）

花器 銅薄端（銅器）

園芸が発達し、自然の勢いを器に生けることが難しくなっている。花屋に並ぶ花のほとんどがお利口さんなのだ。花一輪ずつの個性が均一化されると個の魅力を引き出すのが難しい。丁寧に育てられた菊では自然の状況を想像しがたいのだ。今回は各々が伸びたいように伸びた勢いのある菊と一本つつ向き合えた時間に感謝している。

銅器に施された絵は一般庶民が踊っている様を描いた物であろうか。今までの自分だと絶対選ばなかった器である。自然を表現する身として、人の存在を消したいという気持ちが強かったが、今は人が花と在る景色を受け入れることができている。人が花と在るあたたかさが身に染みるのである。



『魅力』

健一郎

マスクをつける事が日常になってから、化粧の時間が減ったとよく聞く。そんな中私は髭を伸ばしてみた。

菜月の勧めである。私は中学生の頃、叔父に買ってもらった髭剃りを毎日使っている。伸ばし始めて2、3日で鏡をみたとき自分の顔に違和感を感じた。髭については漠然と、歳を重ね90歳ぐらいになれば時に山で菜月と暮らす際、白い顎髭だけ伸ばし、仙人のような生活ができたならと考えていたくらいである。

ムダ毛処理と言う言葉がある。無駄な毛、つまり汚らしく見える毛を処理し綺麗に見せようとする行為である。これは人の目があるからこそ成り立つ行為である。

植物を見る行為、また見せる行為として発展してきたいけばな。花を生けるときは多すぎる葉、虫食いの葉などを取り除く事で美しくみせる。見ていて気持ちのいい花を生けることが基本にある。

余計な毛とはいうものの、毛にも役割があるといわれている。服を着る習慣がなかった時代は体温維持、外界からの刺激を和らげる役割があるそう。そして現在、残っている毛は特に大切なものを守るために生えている。葉っぱは大切な幹を、花びらは蕊(しべ)を守っている。そして毛も

花びらも、独立的な役割も持つ。髪の毛も人を惹きつけるためのその人の魅力となり、花びらを使って虫や鳥、人を魅了する。

つまり、余計なものでは断じてなく、それぞれが役割を持っている。美しい、美しくないの物差し、つまり、みる、みられる関係においては、余計な毛であるという認識が正確であらう。

身だしなみと、おしゃれはどちらも、みられる場合において成り立つ。

花を生ける際、花の身だしなみを整えるべく葉を整理するが、触れる人の技量によつては魅力が失つてしまふ事がある。没個性的な花になつてしまい、その花である必要性がなくなつてしまふ。一枚の葉っぱ単位での個性を考える事はまだ難しいが、せめて一本一本の花ごとに、その個性を引き出し、より魅力的なものとして存在して欲しいと考えている。時には、私の願望で花に迷惑をかけることもある。おしゃれは我慢だということだろうか。

身だしなみは周りへの配慮であり、おしゃれは見せたい自分をみせることである。周りへの配慮を考えることで、ある一定の水準以上の清潔な花を生けることができる。個性を失わずに生ける事が難しいのは清潔さを求め、手を加えるほどにその花の元の姿から遠ざかつていくから

である。だがやはり、忘れないでいただきたいのは、身だしなみを整える事ができて初めておしゃれをする事ができることだ。

私にとって良い花とは、同じ種類であらうと各種物の個性を存分に引き出し、生命力に満ち溢れ、輝いている状態の事を指す。その個性が私にとつて苦手な種類の特性であつても、自分の好みに寄せず、その個性、つまり魅力を引き出すことでその命が輝くのである。

私は植物と向き合うだけでなく、グループホームで人と日々向き合っている。なんとなく自分が今までしてきた事が言語化できる程にまで整理でき、スッキリとしている。

認知機能の低下が著しい利用者を抑え付け、職員にとつて都合の良い1日が過ぎていくことに我慢ならないうでいる。各利用者の体に無理がない範囲であれば本人が望みさえすれば、何をしたいか。職員が押さえつけなければ、利用者は生き生きとしている。机の上に椅子を置いても良いし、机が持ち上がらないのなら手伝おう。机が汚れたら、消毒すればいいだけだ。

私の1日は利用者と絶えず、いたずらをしあい、注意され、不安と向き合い、本人がしたくてもできないことを、自分を剥き出しにして、お

手伝いをしている。介護のことを、できなくて可哀想だからしてあげようだなんて考えたことはない。間違つても職員が、自己表現をしようとしている人の障害にだけはならないでいて欲しいと強く願う。頑張り屋さんを頑固な高齢者として見て欲しくない。家族の介護を助けるため、立ち上げられた施設だが、施設の目的は利用者の生きる意義を見出し、個々が生き生きとして最後まで生活できる環境を整える事ができたらなと考えている。

自分の価値観を押し付けた瞬間にその人のらしさは、その人の中に逃げ込んでしまい、表出しない。その人の奥にある、らしさを引き出す。これが生きるということでは無いだろうか。安心できる環境に身を置けば自然と取り繕う必要がなくなる。その人自身が認められたと感じた瞬間からその人が輝く。

周りからどう思われているようと、生き生きしている人は夢中だ。生き生きしている人の目が大好きでこの仕事をしている。

生き生きと生きることが、最高の一生である。今は考えている。

生きる事は美しい。

一週間程、髭を伸ばしてみたがどうもしつくりこない。鏡に映る自分

が汚らしく見える。叔母からも、大ブーイング。「私の前でご飯を食べないで」と騒いでいる。菜月だけは、「おじさんみたいでええやん」と言ってくれているのだが、私自身が耐えきれずに剃った。

しかし、道を歩いているとどうも髭が似合う人とすれちがう。その髭は丁寧に入られされ、その人の魅力となり、静かにそこにいる。虫食いの葉が似合う花、ちぎれた葉、奇形な花があろうとも、それが魅力とさえなれば、あるべきだ。むしろその魅力を取り除くことで、大きなマイナスに働くわけである。その人にとつて似合う、似合わないの問題である。





赤い実 黒い種

△6頁の花▽ 仙溪

花材 梅擬(綱の木科)
枯向日葵(菊科)

糸菊3種(菊科)

花器 陶花器

ウメモドキの赤い実、黒い種をびっしりつけた大輪の枯ヒマワリを合わせてみた。赤、ピンク、白のイトギクを加えると、それぞれの命が輝きました。

枯ヒマワリはかなり重い。重めの剣山に太い支柱を立てておき、それに丈夫な針金でヒマワリの茎を固定している。



レモンちゃん

ストーブにへばりついて離れません。みなさんもあたたかくしてくださいます。



レモンちゃん

健一郎先生が立てた菊の立花は、少し手直ししながら2週間以上、玄関を飾っています。



初冬の盛花

△7頁の花▽ 仙溪

花材 木瓜(薔薇科)

水仙(彼岸花科)

寒菊(菊科)

花器 陶水盤(清水美菜子作)

ボケは春の花だが秋にも咲く。秋から冬まで花を咲かせるので寒木瓜とも呼ばれ、冬に咲く水仙と時季が少し重なる。同じく「寒」のつくカンギクとの3種でとり合わせるとういかに初冬の風情が感じられる。私の好きなとり合わせだ。

でもボケもカンギクも少々値が張る。もう少しだけ感じた感じにするなら、スイセンにアカメヤナギとバラの組みあわせもオススメだ。

アカメヤナギの枝分かれ1本。

スイセン2本。

バラ1本。

レモンリーフ少々。

先日、中学校のいけばな体験授業でこのとり合わせで教えたが、バラの葉を大事に広げ、アカメヤナギの赤い側を自分の方へ向け、スイセンが気持ち良さそうな場所を考えながら、皆素敵な花をいけてくれた。

少ない本数でも組みあわせ次第で見応えのある花になるのだなあと、しみじみと感じられて、私自身とても貴重な体験になった。



柳行李 椿つばき

仙溪

花型 生花二種挿 草型 副流し

花材 行李柳（柳科）

椿（椿科）

花器 煤竹竹筒

明治時代以降、筆筒たすが普及するまでは、行李こくり（籠の箱）に服や物を収納していた。行李の材料として柳が使われたが、柳細工は2千年前に新羅しらぎから伝わったそうだ。

奈良正倉院御物の中にも「但馬国産柳箱」がある。但馬国のコリヤナギ（杞柳）で編まれた杞柳細工が広まって、様々な行李がつくられ利用されて、コリヤナギはコウリヤナギ（行李柳）と呼ばれるようになった。

柳行李は現在も豊岡でつくられている。節のない細く長い枝にするために頻繁に脇芽を摘んで育て、初冬に刈り取り、足元に水を絶やさず冬ごもりを終えたものが、晩春に皮をむかれてやっと細工の素材になる。行李柳は撓ためやすい。いけていて細工に適していることを実感する。



柳行李

出典：<http://ei4web.yz.yamagata-u.ac.jp/mogamigawa/life/yanagigouri.html>

万年青の生花

仙溪

万年青（百合科）

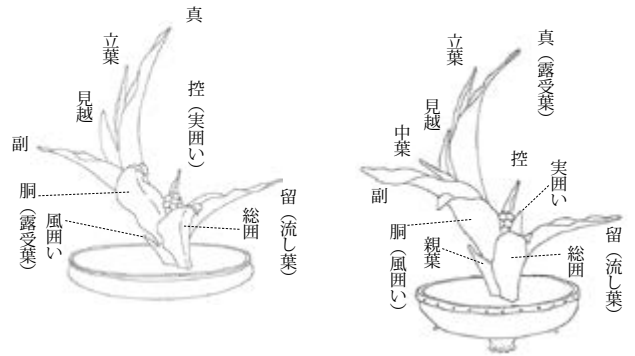
常緑多年草。東海道以西の暖地の山地の林下に生える。

「都城（都尉）」は大型の葉に白い覆輪のある品種で、江戸時代から知られる薩摩おもとの代表品種。

常緑の葉と初冬から赤く色づく実を大切に扱い上品な姿にいける。実の茎に添え木をしておくと長く楽しめる。



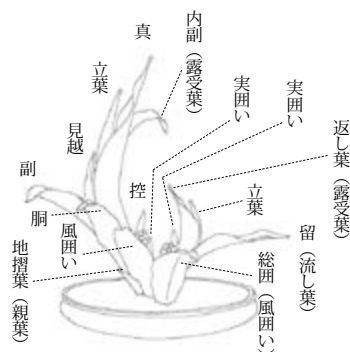
九葉一果



十五葉二果



十三葉一果



壁画に描かれたハスと瓶

仙溪

仏教誕生以前より、古代インドではハスを生命そのものの象徴としてとらえていたことや、強い生命力を持つ聖樹に対する信仰心があつたことを、前号まで見て来た。では、古代インドでのハスに対するイメージは、仏教が伝わる中でどのように変わっていったのだろうか。

スに、無から出現する世界、宇宙を重ねていたことがうかがえる。何かがハスから生まれるというイメージは仏教の經典にも様々な形で引き継がれ、また新たなイメージも加わって行くこととなるのだが、詳しいことは一旦置いておき、まず中国の西の玄関口、敦煌ほかの壁画から、いけばなの観点で見て絵の中のハスの気になるものはいくつか紹介してみよう。

① ヒンズー教の神話でも、ビシュヌ神の臍から生じた蓮華の上にブラフマーがすわって宇宙を創造した話があるが、水から生まれるハ

大乘仏教において出家者の大切な持ち物の一つに水瓶がある。菩薩がよく手に持っているのも水瓶で、修行中である菩薩が持っているのは頷ける。図①は菩薩が右手

に持った水瓶に花が挿されているように見えるが、水瓶は浄水や香水を入れる容器なので、悪い物が入るのを防ぐために花で口に蓋をすることもあつたようだ(図②)。はたして図①の花も蓋として描かれているのだろうか。

また、花を挿したように見えるガラスの器を持つ菩薩の絵(図③④)もあるが、古代インドでは生命の源としての水を壺で表現し、そこからハスが生まれ出る図像(満瓶と呼ばれる)もあつたので、循環する生命そのものを表現しているのかもしれない。このガラスの器と花にどんな意味があるのだろうか。



大勢至菩薩立像(絹本設色)。敦煌莫高窟。(唐代)。
ベルシャ製の銀製壺のような瓶にハスが挿されている。
出展：<https://kknews.cc/culture/5bp4e8l.html>



唐の太宗・李世民的五女、李麗質(621～643)の墓の壁画に、ハスの花を挿した瓶を持つ侍女が描かれている。西安の北西に位置する昭陵にある。
出展：<https://kknews.cc/zh-my/history/5o23jn8.html>



ガラス碗を手に蓮を養う菩薩。敦煌莫高窟328窟壁画。盛唐(713～765年)。
出展：https://spc.jst.go.jp/experiences/change/change_1719.html



ガラス碗を手に蓮を養う菩薩。敦煌莫高窟186窟壁画。中唐(766～835年)。
出展：<https://kknews.cc/culture/5bp4e8l.html>



仏牙舍利が奉安されている多宝塔

「私は56枚のオーク（ナラ）の落ち葉を写した。その葉脈を見られる限り注視した。かつて水や養分の通路であった生命活動の証である。それは、1枚1枚の落ち葉を通じて行った命との対話だった。ドイツの地で私と出会った。遠く日本の鹿王院まで運ばれた56枚の落ち葉たちは、稀有不運命を持っていたのかもしれない。」藤井隆也
（鹿王院令和襖絵56面落成記念拝観カタログより）

今後も襖絵は見られるそうなので、是非訪れてみてほしい。

襖には藤井さんがドイツから持ち帰ったナラ（檜）の葉が一枚ずつ描かれていた。そこにはそれぞれの葉の命の気配があった。居ながらにして森を感じる不思議な体験であった。

で、舍利殿には源実朝が宋から将来したと伝えられる仏牙舍利を奉安する。

鹿王院は足利義満ゆかりの寺で、舍利殿には源実朝が宋から将来したと伝えられる仏牙舍利を奉安する。

鹿王院令和襖絵五十六面落成記念拝観
会期 10月30日（金）～11月14日（土）
会場 鹿王院
嵐電「鹿王院駅」徒歩4分
襖絵制作 藤井隆也
テキストZOGUでもご紹介した藤井氏が56面の襖絵を描かれたのを見せて頂いた。



アメリカハナノキ

桜子

花材 アメリカハナノキ（かえで楓科）

月桃の実（きょうが生薑科）

ダリア（きく菊科）

花器 銅打ち出し壺

花屋さんの庭で紅葉したアメリカハナノキを切ってもらった。アメリカ北部～カナダに分布する落葉高木。公園や街路に植栽されている。別名アカカエデ、ベニカエデ。早春、葉よりも先に紅色の花が咲き、秋に美しく紅葉する。

赤い実と花を合わせて銅の器にいた。



アメリカハナノキの花・葉・実

出展： <http://www.forest-akita.jp/data/2017-jumoku/133-amerikahana/amerikahana.html>



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2021 年
12 月号
No. 702

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





純白のクリスマス

△2頁の花▽ 桜子

花材 メラレウカ

(フトモモ科)

シンフォリカルポス

(すいかすの科)

ダリア (菊科)

花器 ガラス花器

メラレウカとダリアの横に添えてある木はシンフォリカルポスという名のスイカズラ科の植物。英名はスノーベリー。秋の頃きれいな白い実をつける。何度聞いても覚えられない名前だが、調べてみるとギリシャ語で「房状になっている果実」という意味らしい。日本語では普通すぎる意味なのにギリシャ語ではすごくミステリアスな言葉になる。

純白の実がクリスマスらしい雰囲気を出してくれる。

最近では長い期間出荷されるようになったメラレウカ。足元をよく割っていけると日持ちしてくれて豊かでしなやかに花を引きたててくれる。

暖かそうなショールを巻いてあげたくなった。



メリークリスマス

△3頁の花▽ 仙溪

花材 ブルーアイス（ひのき）

薔薇（ばら）（薔薇科）

スプレー薔薇（薔薇科）

花器 陶花器

小雪を過ぎると風の冷たさに体がこわばる。でもクリスマスがやってくると思うとウキウキする。12月にいける花には温もりを感じたい。森の針葉樹に純白と深紅の花を添えると、清らかで温かな優しさが感じられる。





初冬の二瓶飾り

△4頁の花▽ 健一郎

花型 生花 二瓶飾り

花材 満天星(躑躅科)

水仙(彼岸花科)

花器 煤竹竹筒

結晶釉水盤(前田保則作)

ドウダンは面で葉を見るように生けた。枝振りも格好が良いがお生花の形には線が増え、効果的に魅せることが難しい。まだ咲く前の水仙と飾った。二瓶で飾ると季節の幅が限定され、より今を味わう事ができる。





十四世の生花

△5頁の花▽ 仙齋

花型 生花 二種挿し

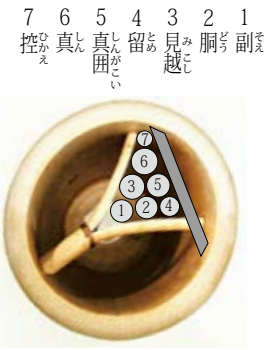
花材 桐(桐科)

満天星(躑躅科)

花器 陶花器

以前のテキストでは白黒写真だったのでカラーで再掲載。健一郎の生花と並べてみた。喜ぶ父が目浮かぶ。

仙溪



◎ 又木配りのかけ方
◎ 役枝を入れる順番と位置

◎ 横から見たところ
真の先は足元の真上に。

若松生花

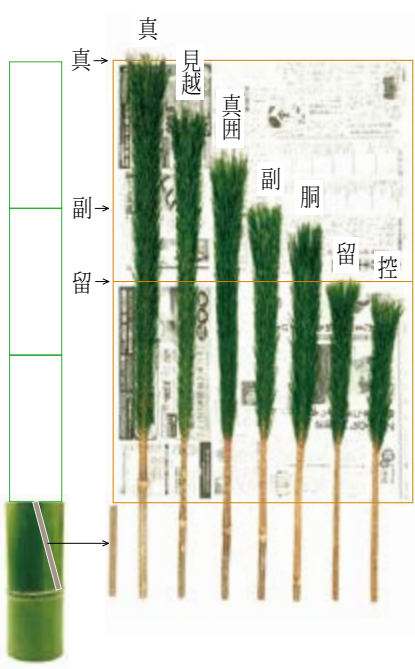
仙溪

花型 生花 真型
花材 若松 (松科)
花器 青竹竹筒

今年もそろそろ新しい年を迎えようとしている。12月の中旬からお正月花の稽古が続く。ソーシャルワーカーの人達はおそらく花をいけるどころではないだろう。コロナ禍にあっても稽古ができることに感謝しよう。

◎ 枝を選び、それぞれの長さに切り、足元の葉を取り除き、木肌を美しく磨く。

◎ それぞれ撓めて形をつける。数字はいける順番。



昨年、宅配稽古に添えるために若松生花のプリントをつくったので、ここに掲載しておく。飾る場所によって右勝手、左勝手を決めてからいけること。

竹筒（9寸＝27センチ）の3倍と新聞紙の幅がほぼ同じなので、新聞紙を広げた幅が真の水際からの長さとなる。

副は真の3分の2。留は真の2分の1。

これらの長さに水際から下の長さを足して切る。

諸木の中に松の緑は四季に変わることがない。このことから祝意の生花としていけられてきた。慶事の花として、神への供え華として、清浄純粹な心でいける花である。

切り立ての清々しい青竹の筒に若松7本を「真の花型」にいけ、水際に紙を巻き、金銀の水引を「ともえ結び」にする。

真塗りの蛤板、または白木の板を敷いて飾り、紙が濡れないようにやや少なめに水をはる。



『言葉と自然』

健一郎

自分が思う花の楽しさを稽古で人に伝えるようになって3年くらい経った。

あるお弟子さんが生けた菊の花を拝見した。やや前傾に直立した菊の葉が殆どむしり取られている。「葉を取るのが楽しくてつい取りすぎてしまいた。」と笑っている。綺麗な目だった。花の味わい方はそれぞれで、彼女は自分に素直だった。私の花の味わい方が拡張されたようにも思う。葉を取ることに罪悪感を感じる気持ちにはもちろん大切だが、それは倫理を通して感じられる感情であり、葉を取る行為のみを考えると不快なものではない。

私は主として、花の美しさと生命力を味わっているのかなと自分では思っている。個人的に近頃思うのは、情報で溢れる世界になってから、みんな頭で考えすぎているようにも見える。人が知っている範囲の事ならなんでも調べれば出てくる。情報を価値にすることは、自分の価値、本質を把握しておらず、自分が何をしているかわかっていないという事である。もったい

なく感じる。情報自体に価値はない。家元が文阿弥花伝書をインターネットから閲覧しているのを見て感じた。なんていい時代なんだろう。知る環境はこれ以上なく整っている。情報をどう使うかである。

知る環境が今に比べて不便だったに違いない室町時代。その時代の人達が真摯に花に向き合い、悩み、一つの答えとして記したものが花伝書であり、禁忌であつた。室町の花伝書には禁忌が多いという。言葉の響きが悪い花は特に嫌われた。紫苑は祝儀の席では死に通じるところから禁花にされ、赤い花は引越の際には火を想起するので禁花とされていたそうだ。花一つ一つに名前をつけ意味を考へる。一つ一つの花と向き合っていたことがうかがえる。

「古代の呪術性のなごりともいえる禁忌の意識を取り去つたのが近世に生まれた生け花様式である。それは草木花が古代との血縁を失い、単なる花材になったということである。」

と川瀬敏朗は述べているが、ある部分では納得できるが、ある部分では再考の餘地があると考へている。観念的に花と向き合

い、真摯であることは立派なことであると個人的に考へている。その一方で、実践的に身体を通じて真摯に向き合うことも大切であると感じるようになった。つまり私は真摯に花に向き合う姿勢が好きなのである。言語や意味を重視し、脳を使つて考へる観念的解釈と五感や身体を使つて感じ、そのものの本質と向き合う実践的な解釈があると考えている。

室町の頃から花伝書などで決まり事を作ることは、言葉で論理的に解釈したもので、剥ぎ出しの自然性や本質は言葉で伝えられるはずがない。なぜならば、言葉にした時、それは物事を定義し、観念的に解釈することになるからだ。花伝書で伝えたいことは決まり事そのものではない。決まり事として、本質を人に伝えるべく仕方なく言語化し、仕方なく論理で説明している。それは人に思いを伝える手段が言語だからである。言葉を使用せず思考することはできない。このジレンマにソクラテス以降の哲学者は苦しむことになる。

葉をむしり取る楽しさは、身体的なものであり、また、原始的でもあると考へている。生花

を生ける際に枝を撓めたりするのは確かに楽しい。オランウータンは水平で頑丈な、身体を預けられる木を見つけて若い枝を集めた後、曲げて巣を築きそうに作る。そんなものなんだろう。人と枝との付き合いの長さは思っている以上に長いものかもしれない。二足歩行の始まりにもいろいろな説があり、その中の一つに二足歩行は木の上で始まったというものがある。外敵が比較的少ない木の上での生活を始めた、僕らの先祖にあたるかもしれない生き物たちが木と花の中で生活していたということとは、目今私たちが花を見てなんだか感じる安心感とつながっているのかもしれない。

「物真似には似せないという位がある。物真似を究めその物にまことなりきつてしまえば、もう似せようと思う心などない。こうなればただ見せ場を嗜むのみで、花が咲かないということがあろうか。」

世阿弥の風姿花伝からの引用である。似せようと思う心は頭の中の解釈でしかない。そのさきに理屈でなく実践的に本質と向き合うことで花を咲かすことができるのであるのではないだろうか。似せないという境地は面

白そうだ。

言語、論理と対極にある生命そのものの広がり自然のありのままの姿。言語、論理は人間の脳が世界を切り取り、論理を抽出して、都合よく構築した整った人工物であるから、自然そのものの本質はこぼれ落ちやすい。科学や学問はただひたすらに言葉と論理の力で世界を分類し、名付けをする行為ともいえる。

そのためには剥ぎ出しの自然や本性に触れている必要がある、五感の意識のありようが大切である。言葉や情報でなく、目の前の花、人そのものを受け入れることが大切である。

五感の力を鍛えることはありのままの自然に反応できるための準備である。何か不思議なものを見た時に人は分かつとうとするが、分かつとうとしてはいい。そのものを受け入れるのだ。言語や論理は「分かる」だが、自然の本質は、そのものを「受け入れる」のだ。文章に書いて今納得した。すごく気持ちがいい。

菊の立花

△表紙の花▽ 健一郎

花型 除真立花^{のきしんりつか}

花材 満天星^{どうたんつじ}(躑躅科)

水仙^{ひがはんはな}(彼岸花科)

小菊4種^{かんぎく}(菊科)

寒菊^{かんぎく}(菊科)

花器 獅子耳銅立花瓶

毎年、菊の季節を心より楽しみにしている。中でもこの乱れ菊は特別である。剥き出しの自然の力を強く感じる。今の自分と波長があう。今年も直に触れることが出来て嬉しく思う。去年は菊一色で立てたが、今回はドウダンと水仙を共にした。それぞれがそれぞれ場で魅力を発揮できている。

横から見た奥行き



④



⑤



霧島躑躅の生花 仙溪^{きりしまつづじ}

「紀の国わかやま文化祭2021」の「いけばな芸術展」にご招待いただき、関西の先生方と共に和歌山城ホールに花をいけてきた。(11月13日〜14日) (写真④⑤)

ガラス越しにお城を見る素晴らしい空間で、イチヨウの黄葉を背景に季節外れのツツジの花が映えていた。

偶然にもツツジは和歌山市の花だそう。ちなみに和歌山県の花はウメ。お土産に梅干しを頂戴した。美味しく頂きました。

花伝書を読む

仙溪

立華時勢粧を読む^㉔

立花時勢粧 下

識語

楽天は竹の描きがたきを歌に残し、金岡は筆を捨て松に名づく。嗚呼葉しげり枝重なり景気の微細なる所うつしがたき事か。しかはあれど花影のあらたなるにまかせては人を選ばず。ここに図するものなり。

辰の九月日

書林 中野氏編集



『立花時勢粧 下』より

一昨年までの5年間で「立華時勢粧」を紹介した時、この識語（本の由来や年月を記したもの）を抜かしていたので、ここに掲載する。

楽天とは中国唐代中期の詩人、白居易（772-846）の字。自然や暮らしの中の輝きを謳った詩は日本にも影響を与え、源氏物語にも多く引用されている。

金岡とは巨勢金岡のこと。平安時代前期の絵師で、熊野権現の化身と絵の腕比べをして負かされた「筆捨松」の伝承がある。

この識語もだが、「立花時勢粧」には「種樹郭橐駝傳」（テキスト632参照）など中国、日本の古典からの引用が多い。序文の次の箇所、

されば瓶上に南山の美をつくし、砂鉢に西湖の風色をうつす。ちからをもいれずして高き峰、深き溪を小床に縮む。至らずして千里の外の勝景をみること、その術諸芸の及ぶところにあらず。（立花時勢粧序 テキスト612参照）

この印象的な部分にある「ちからをもいれずして」はもともと紀貫之による

古今和歌集の序文に使われている。

やまと歌は、人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける。世の中にある人、事業、繁きものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて、言ひ出せるなり。花に鳴く鶯、水に住む蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける。

力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をもやはらげ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり。

（古今和歌集仮名序の前半部）

古今和歌集も立花時勢粧も、前回紹介した「文阿弥花伝書」の序文も、自然の輝きを伝える術として歌や立花の素晴らしさを語っている。

「季節の輝きを表現する」ことが原点なのだと教えてくれている。

「文阿弥花伝書」の謎

前回序文を紹介したが、「文阿弥花伝書（鹿王院蔵）」には謎めいた所がある。文阿弥は室町時代の「たて花」の名手で足利將軍に仕えた同朋衆の一人。

1、巻末の年号と日付の謎

天承元年 五月十三日

天承元年は二二一年、平安時代だ。5月13日という日は巻3の最後にも「五節花の事」として「五月十三日竹」とある。これは中国の俗説「竹酔日」のことを指していると思われる。この日は竹が酔っているので植え替えに最適な日とされた。

天承元年を調べてみると、宇治に蟄居していた藤原忠実が鳥羽上皇に呼び戻された年にあたる。

常識的には花伝書の内容が平安時代のものとは考えにくいのが、なぜこの年号と日付を取って使ったのか。植え替えた竹が根付き育つ如く、挿花の極意を伝授する意味で花伝書相伝の日付としたとも考えられる。

「五月十三日竹」以外にも「菊ばかり

立てず」と書かれていることなど、他の花伝書には無い内容があり興味深い。

2、「花の書」「紀貫之」「宇治の宝蔵」

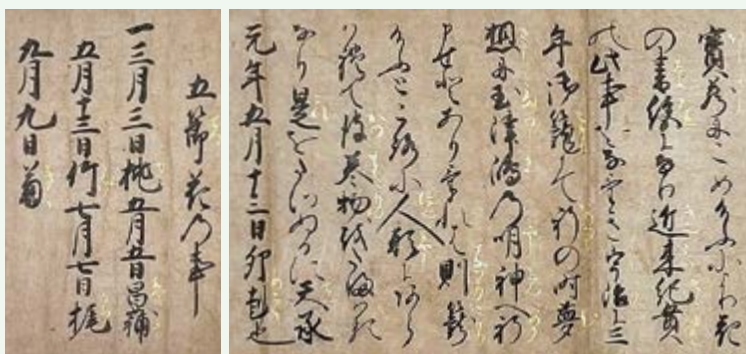
「玉津島明神」

わが朝において、花の書宇治の宝蔵に込めたまうより花の書絶になり、近来紀貫能この事をなげき、宇治に三年お籠候て祈の時、夢想に玉津嶋の明神へ祈申せとありければ、則ち籠給うところに入形にあらわれて彼巻物を賜るなり。これをたづぬるに、天承元年五月十三日卯の刻なり。

巻3に右の文章があり「花の書」なるものが書かれている。

紀貫之(872-945)と玉津島明神の関係は能の「蟻通」の中でも語られる。紀の国・和歌浦の玉津島明神は和歌の神様であり、貫之も参詣したであろうことが「貫之集」からうかがえる。その帰途に和泉国の蟻通明神で詠んだ歌を題材に能の「蟻通」がつくられた。

紀貫之の書いた「土佐日記」は和語



『文阿弥花伝書・鹿王院蔵』巻3の部分。④花の書について、⑤五節の花に五月十三日竹とある。『特別展 いけばな 歴史を彩る日本の美』(2009)より

和文和字による日記文学の魁けである。また彼は古今和歌集の編纂のあと、宮中の書物を管理する御書所預に任ぜられている。日本的なるものを生み出した紀貫之に、宇治の宝蔵で「花の書」を見つけた際には、何か意味がありそう。

「花の書」とはいかなるものを指すのか。古い時代の供花について、その挿法を記したものでしょうか。



玉津島神社の北西にある雑賀岬展望台に登った。古の「若の浦」もこんな景色だったのでは。

玉津島神社

私も明神様から花道の極意を授かろうと玉津島神社を訪れた。(11月13日)
上古より天照大神の妹神である稚日女尊をご祭神とする。またの御名は丹生都比売神である。

紀ノ川の河口に位置し、潮の干満差が大きく、満潮時には干潟に点在する山が海面に玉のように浮かぶ島となったそうだ。周辺は美しく稚い浜辺「若の浦」と呼ばれたが、聖武天皇によって明光浦と命名、又いつしか「和歌の浦」とも呼ばれるようになる。歌に多く詠まれており、衣通姫尊も祀られるようになってから和歌三神の一社として崇められてきた。和歌山市には未知の古墳が多く眠っていると聞く。「花の書」ゆかりの玉津嶋明神について、ますます興味が湧いてきた。



玉津島神社の紋。玉(宝珠)と菊だろうか。白波を白菊と見る和歌がこの地で詠まれている。



季節の輝き

△12頁の花▽ 仙溪

花材

衝羽根（白檀科）
つくばね びやくだん

鳥瓜（瓜科）
からすうり

岡虎の尾（桜草科）
おかとらのお ざくらそう

花器 陶花器

カラスウリの愛らしい実はまさに季節の輝きだ。見ると思わず微笑んでしまう。葉はすぐに萎れるので撮影直前まで水に浸けておいた。オカトラノオの紅葉とツクバネを合わせると、とびきりのご馳走になった。



レモンちゃん。太陽のあたる温かい場所をよく知っている。

いけばな

桑原専慶流

テキスト

2022 年

12 月号

No. 714

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





実り

仙溪

栗の渋皮煮を頂戴した。鬼皮だけを剥き、渋皮を美しく残すには熟練の技がいる。砂糖で煮るだけのシンプルな作り方だそうだが、飴色の見た目も美しく、柔らかで甘くて美味しい。

ちなみに調べてみると植物学上では鬼皮が果肉で、渋皮は種皮、その内側が種子にあたるので、種を食べていることになる。他にもイチゴは花托がふくらんだもので、表面のつぶつぶが果実にあたるそうだ。一つの花にめしべが百以上あるためにそうなる。

植物が子孫を残す工夫は千差万別だが、種子を宿した「実り」の姿はそれぞれに美しい。見て食べることに加えて、いけて実りを味わっている。

ロウヤガキ ロウアガキ

△2頁の花▽ 櫻子

花材 老鴉柿 (柿の木科)

糸菊 (菊科)

木苺 (薔薇科)

花器 手付き木通籠

ロウヤガキは中国原産の小さな実の柿で、黒く熟するため鴉の



字がつく。読みはロウアガキなのだが、呼びやすいロウヤガキと呼ばれるようになり、老爺柿と書かれることもある。
色づいた木苺が季節感を深めてくれる。



コガネシダ

△3頁の花▽ 仙溪

花材

美男葛（松房科）
水仙（彼岸花科）

水仙（彼岸花科）
黄金羊歯（岩櫨、葉科）

花器 燻し赤花器

小さなシダが密生した鉢植を土ごとビニールで包んでいけている。黄金色というより曙色だろうか。優しい色の繁みから季節の実と花を覗かせた。





2種の実

△4頁の花▽ 仙溪

花材

姫笹ひめささ杉しのぎ（檜科）

七竈ななかまじの実み（薔薇科）

梅うめ檀だんの実み（梅檀科）

花器 金属花器

ナナカマドとセンダンの実と常緑のヒムロスギ。実たちが主役のいけばな。



柊

△5頁の花▽ 健一郎

花型 生花 草型 副流し

花材 柊ひいらぎ（木犀科）

花器 陶花瓶

ひーいらぎ飾ろう、ふあららーと12月になるとこのメロディーが街を包み込み、クリスマス色になった。このDeck the Hallsはウェールズの民謡である。去年の冬2人でリトミック※を受講して以来この音

※リトミックⅡ伴奏にあわせて楽器を演奏したり体を動かしたりして、潜在的な基礎能力の発達を促す音楽教育法。



樂が一年を通して頭から離れなくなつた。季節関係なく頭で流れ2人で口ずさむ。民謡独特の中毒性とリトミックの楽しさが合間つてのことだろう。キリスト誕生の数百年前、ケルトの文化ではセイヨウヒラギを死と再生のシンボルとして崇拜されており、意味合いは変われどもゲルマン人においてもキリスト教においても特別な常緑樹である。日本においても特別な木で古くから柗の鋭い棘は邪気を払うとされ庭に好まれて育てられており、節分ではお馴染みの樹木である。年を取ると葉は丸くなるらしく家の柗はそれであつたのだが先祖返りをしており、年々棘が増えてきている。

家の庭の柗が咲くと、僕と妻は喜ぶ。2人にとつてなんだか特別な木であるようだ。枝振り、艶のある葉、花の甘い香り、魅力で溢れている。妻と愛でる好きな木のうちの一つである。作例はたまたま花を付けた柗をお花屋さんで見かけたので求めた。取り合わせや様式では迷わず、生花を選択した。一種で堂々とした立ち枝と勢いのある横枝。それぞれを味わい、その魅力を引き出そうとした。良い季節の花である。



梅擬の生花

△ 6 頁の花▽

花型 生花 草型 副流し

花材 梅擬 (繡の木科)

花器 銅薄端

日本いけばな芸術展出品作

和田慶千

梅擬除真立花

△ 7 頁の花▽

花型 除真立花

花材 梅擬 (繡の木科)

松 (松科)

伊吹 (檜科)

鼈甲桎木 (錦木科)

見返り草 (紫蘇科)

大文字草 2 種 (雪の下科)

斑入り紫蘭 (蘭科)

杜鵑草 (百合科)

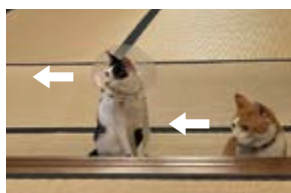
寒菊 (菊科)

花器 天女紋銅花器

日本いけばな芸術展出品作

桑原仙溪

梅擬の生花と立花。実の小さなものは滅多にいけられない。折れやすいので、太くてひねた枝のどこが生花の真、副、留になるかの見極めが肝心だ。引



健一郎先生が立てた立花を一緒に拝見するレモンとメイ。

き締まった水際が作れば、水面から立ち昇る生花特有の美しさが生まれる。

立花には梅擬の伸びやかな細枝を真に立て、松の緑と季節の草花を取り合わせた。ぐるぐると捻れた松をどう見せるかに悩んだが、様々な方向へ出た花材の調和が立花の見所であり醍醐味だ。多種の花材を調和させることができる立花という様式の不思議さ。それを生み出し、自然の妙味を味わい尽くした先人は、会得した物を花伝書に残している。いけばなは今もその延長線上にある。

なぜ人は花を見て落ち着くのか

健一郎

華道家らしい花展とイベントで目まぐるしい秋だった。秋のお花を花屋で見ても展覧会やデモンストレーションで生けるのは気持ちが良い。その裏で日は一日づつ過ぎ、いつの間にか秋を感じる前に終わってしまうかもしれないという焦燥感と過ぎた秋でもあった。その時の自分の願いは御所を散歩したい、ただそれだけだった。家が近いという理由だけで、特に御所である必要は無いのだが、秋を感じられる場所、季節、自然に身を投げたいと言う思いは日に日に募る。

花をいけるだけでは満たされていない。自分は、自然に身を投げ、その余韻のようなものなのだろうか。自然の場にいずとも草木といられるのは。切った方がその花とよく向き合える。それは己の未熟さもあってだろう。自然の中から帰ってきて初めて自宅で花を生けられる気がする。

目に見えるところ以外でも人工的な空間は驚くほどの勢いで増えている。SEの書き出す未来は幾何学的に合理的に設計された超人間的な空間を思い浮かべる。そしてそれは今は実現しそうにも見える。

SEの世界のような企業はいくつか思い浮かぶが、アメリカのAmazonという会社が植物趣味の建物を作ろうとしているらしい。Amazonは最先端のAIで最適化し、未来を予測する会社でその判断が、短期的には結果を得ることができて20年後の正解であるかは分からないらしく、最終的な決定はCEOの感覚であるようだ。予測出来ないことが日常的に起こる。そして少しでも正確な答えが出せるよう精度を上げるため、Amazonはバイオフィリアの建物を作ろうとし今注目を集めている。バイオフィリアとは、人間は本能的に自然とのつながりを求めるという概念で、心身の状態を良い状態にするためには人との状態もだが、自然との関わりが必要不可欠であると言

う考え方である。絵画史において風景画は、身の周りから風景がなくなつてからおこつた。人工物で溢れ自然の物がなくなつた場所において自然が求められるというのは自然な流れだと感じる。

「E」か、「A」化に進むも、つまるところは自分の感覚である。それを研ぎ澄まさせるためにバイオフィリアの効果が期待されている。経営をする人の中にもビジネスマンの人の中にも一部の人は木の枝、灯台躰とうだいばうなどを飾る人がいる。そしてその中でも最近では観葉植物に注目が集まっているらしい。在宅での仕事や家にいる時間が長くなったことが起因しているとのこと。豊かな自分があつてこそ他のことができるのだという。ビルや自動車道の街路樹といったグリーンではなく、四季と人生のうつろいを感じさせる自然の設計を求める流れになつていくのだろうか。植物を楽しむ人が増えるのは喜ばしいことである。

人がいまのビルに囲まれて生活していた時間より、緑の中で

生活していた時間の方が長い。建物を創る前までは、緑の中が安全で敵がいなかったためである。そのため落ち着くのだろうか。

なぜ人は花を見て落ち着くのか。自分なりに感じたことをつらつらと書いていく。

10万年前の墓穴の一つからムスカリであろう花粉が見つかった。ネアンデルタール人。人間の生命と花が初めて結び付けられた。花と人間の魂、靈魂との関係を示したのとして有名であるが、このときには花に対して特別な気持ちを持つていたと捉えて良さそうだ。それより以前のことにについてよく考える。

まず人以前の話から考える。木の実を予兆させるものとしての花があつたのではないかと考えている。

猿は食虫類から進化してきた。モグラやヒミズの仲間、蟻とかミミズを食べていた。猿の祖先は虫食ひ。サルサルの祖先は森の中へ虫を求めて入つてい

き、虫食ひの生活をしていた。虫食ひも一括りにはできない。逃げ足の早い甲虫や蛾蛾を食べる猿、幼虫を捕まえるのが得意な猿に別れた。そして強い種が幼虫を食べられる下層部を占拠した。追いやられた甲虫を食べる猿はやがて、果物を食べるようになり、さらに追いやられた猿は葉っぱを食べることになった。葉は果物の2倍のタンパク質を含有している。よつてオランウータンや、ニホンザルのように大型化し、肉を食べるヒトとなった。負けるが勝ちとはこのことであろうか。生存競争に負け、新しい食生を探し続けた結果である。負けて果物を食べる種類の身体が大きくなつていった。

そして果物や葉を食べる種類は頭を使うようになった。動くものに本能的に反射で捕まえて虫を食べる種に比べ、どこにどんな木があり、どの季節にその実がなるのか。その実はいつできるのか。どうやら花の後に実ができるらしいと発見した種はそうでない種に比べ有利だったに違いない。その頃から、花の

状態や葉の状態、植物に強い関心を持つていたのだろうと推測している。記憶力、認知能力が上昇したのだろうか。

よくお弟子さんや、いけばな体験をしている人はお稽古の花に対して「美味しそう。食べられますか？」と実物はもちろん花に対しても多くの質問がある。葉に対してはまない。赤ちゃんや小動物に対して、食べてしまいたいくらい可愛い。というのも綺麗なものに對して抱く気持ちという意味では何か関係がありそうだ。理屈なしに花と向き合う、没頭した大人や子供と話している時間は豊かで多くの発見がある。

鳥類も虫や、果実が主で葉っぱを食べるものは極めて少ない。猿はライバルが多く、葉っぱを食べるしかなかった。だが植物は葉を食べられる想定をしていなかったで、食べられないようにするために毒のあるものが多い。そこで猿は恐る恐るつまみ食いをする。一つの毒を集中させない毒の分散である。マハレというタンザニアのチン

パンジーは、300種くらいの食物メニューを持つている。日本猿であつてもだいたい100種は食べるそうだ。我々も色々と食べているが、種類数では到底敵わないほどである。猿は毒のものを見つけると、学習し、それを子供に伝えるのだが、私はそれを文化の芽生えであると考えている。

それぞれの場でそれぞれの種の生活が少しずつ発展し今の自分の生活があるという認識を持つている。虫を食べていた頃と比べて自分の今の生活が優れているのかと問われれば、不思議とそうでもない。

夕食後妻の菜月と部屋で音楽を流し聴いているのだが、最近録音された自然の音を聞いている。なんて滑稽なことだと自分では思っているのだが、やめられない。虚だとはわかっていても心地がいい。読書や作業が捗る。雨の日は何もかけずに雨の音を2人で聞くのが楽しみである。クラシックは荘厳で落ち着いた感じが、音楽を聴く事が目的の場合は最高である。ジャズ

は心地いい音が会話に弾みをつける。聞こえていても意識せず、そつとそばにある音を最近好んでいる。菜月と昨日も鴨川を歩いてきた。他愛もない話をしながら空気を吸う時間がかけがえなく心地良い。結局なぜ落ち着くかは、分からない。



新世代いけばな展 11/4～6 立誠ガーデン・ヒューリック京都



いけばなインターナショナル神戸 11月例会 11/11 神戸倶楽部

蝦夷松の立花

△表紙の花▽

花型 直真立花

花材 蝦夷松（松科）

蝦夷竜胆（竜胆科）

蔓梅擬（錦木科）

梅（松科）

椿（椿科）

檜（檜科）

鎌柄（薔薇科）

乱れ菊2種（菊科）

花器 陶花器（清水六兵衛作）

日本いけばな芸術展出品作

上野淳泉 桑原健一郎
山本慶智 大野慶友
杉浦慶弥

最高のお花を最高の器で最高の人達と生け込み。五人席の内の1人として立花を立てました。蝦夷松を主に蝦夷竜胆が顔をのぞかせ、様々な花が顔をのぞかせる。毎朝の水替え、手直しも楽しく良い状態をご覧頂けた。この立花が出来上がった時、下山をした時の満足感に近いものを感じた。気持ちいい山歩きだった。

健一郎



『仙齋彩歳』と

『ホッホチャンとケンチャン』

をネットですべて

父の「仙齋彩歳」と母の「ホッホチャンとケンチャン」。この2冊の本には両親のメッセージが詰まっています。この12月で父が亡くなり

10年となる節目に、これら2冊の内容もいつでも誰でも見られるように公開することにしました。

ふとした時に思い出していただき、スマートフォンなどで両親の言葉に再び触れていただければ幸いです。 仙溪

『仙齋彩歳』『ホッホチャンとケンチャン』『テキスト50年分』ほかをご覧ください。←



<https://www.kuwaharasankei.net>

花伝書を見る

立花 りっか まつのきしん 松除真

「南天の洞」

富春軒

松 若松 伊吹 晒木 南天

柘植 小柏 小菊 著我 しるが

(立花時勢粧・下)

中段の南天を境に、上段と下段の景色が違う。上段の色が抑えられているので、赤い実が際立って見える。



上段右上へ立ち昇るのは松の若木だろうか。だとすれば、老松の間に伸びる若い松の初々しさが加わることで、南天の赤い実りが益々映えてくる。

富春軒



枯れヒマワリ

△12頁の花▽

花材 枯れ向日葵3種（菊科）

芭蕉の枯葉（芭蕉科）

薔薇2種（薔薇科）

木苺（薔薇科）

花器 陶花器（近藤豊作）

日本いけばな芸術展出品作

横田慶重 米山慶嘉

川瀬慶裕

枯れヒマワリと呼ばれるけれど、無数の実りが詰まったその顔は艶やかで美しい。その美しさを知っている栽培家によって種が欠けてしまわぬように大切に梱包され、乾いた茎には添え木までされている。

そういえば、3月の流展で私がいけた桜はとても大きな枝で、束を解くと数百箇所の小枝が丁寧に紐で絞られていた。気の遠くなるような作業だ。この老桜をどれほど大切にしていたのだろうと想像しながらいけていたら、いつのまにか桜の立花を立て終えていた。

いける花を届けてくれた人のことを思うことで、その花への思いはより深くなる。いけばなは外見的には花と器の世界だが、そこには多くの人の思いが加わっているのだ。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2023 年
12 月号
No. 726

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





シンフォリカルポス すいかすろ 櫻子

シンフォリカルポス (忍冬科)

ダリア2種 (菊科)

木苺「構母」 (薔薇科)

陶角花瓶 (フランス)

中々覚えられない名前だが、こんなに立派な実をいけたら絶対忘れないだろう。スイカズラ科と言うが似ているとは思えない。

北アメリカ原産でスノーベリーとも言ふ。白い実が多かったが、紫式部の実と間違ふような鮮やかなワインレッド色で実の粒も大きく長くしなやかだ。

今年はヒペリカムやウインターベリー (ウメモドキ) など日持ちがするきれいな枝の園芸種をいける機会が多かった。シンフォリカルポスも又鮮やかな洋花と取り合わせると良く似合う。赤白のダリアといけて、洋間の花として長く楽しんだ。





ネズミモチの実

桜子

鼠繭ねずみもち（木犀科）

薔薇ばら（薔薇科）

アンティーク水差し

アメリカに住むドイツ人夫婦に戴いた水差しにネズミモチと赤いバラをいけた。口が小さく首も細いので多くはいけられないが、このくらいの量が丁度似合っている。

打ち出しによって繊細な装飾が施されている。四頭の羊が四方を向き、子羊と子供が戯れる場面も。美と豊かさ、平和を表しているのだろう。

「美」という漢字は「羊」と「大」でできている。古代中国では豊かさをもたらしてくれる大きな羊に感謝をこめて「美」の文字をつくった。現在の私たちも何を「美しい」と感じるか、固定概念にとらわれず、大らかな心で「感じる」ことを大切にしたい。





南天の立花

仙溪

南天(目木科) なんてん めぎ
 赤芽柳(柳科) あかめやなぎ
 若松(松科) わかまつ
 白梅(薔薇科) はくばい
 水仙(彼岸花科) すいせん
 千両(千両科) せんりょう
 寒菊(菊科) かんぎく
 枇杷(薔薇科) びわ

陶花瓶

昨年12月24日に稽古で立てた立花。撮影したのは1月10日。寒い座敷に飾っていたが、カンギクが咲いて華やいできた頃だ。ナンテンの葉は少し散ってしまったが存在感は充分。

正真の前と左右に加えたビワの葉が花型の引き締め役になっている。横から見ても程良く中を隠してくれている。ビワの葉は大きさ、曲がり具合によって使い分ける。立派な葉なら一葉で役枝にもなる。





白い実と白い花

仙溪

白梅擬（繡の木科）
さいめん ひがんぼのき

水仙（彼岸花科）
すいせん ひがなばな

白椿（椿科）
しろつばき

獅子耳銅立花瓶

小ぶりの立花瓶に格の高い花材3種を投入でいけた。白実のシロウメモドキはいける機会も希なので、その白色に敬意を示せるような相手を探していたところ、敢えて白い花をとり合わせてみてはどうかと閃いた。

以前、ドイツで白い花だけの庭を見たことを思い出した。様々な白い花が咲く庭は幻想的で、庭をつくった人の色へのこだわりを強く感じた。同色の濃淡の世界は、その色の世界へ誘われる感覚を与えてくれるのだと思う。

3種の白色をいける器の選択もなかなか難しい。色を感じさせない銅器を選んだ。





きく
すなもの
菊一色 砂物

健一郎

乱れ菊数種（菊科）

陶砂鉢

今年も無事に乱れ菊を生けることができた。株分けならではの見せ方が、少しは様になってきたのかなと感じている。今回は両者の胴く前置きにかけての景色の差が見どころである。雄株の正真は、全体のバランスを考え、左に振った。今回一番悩んだのが器である。いくつもの器をあてがったが、納得のいくものがなかった。砂物を丸い水盤でも良く映るときもあるが、やはり砂鉢がよく似合う。銅器ほど重たくなく、色が抑えられたものでも良かったかもしれない。砂利、敷板、バック紙で調節した。自由気ままに勢いよくうねる菊は見ていて飽きない。





クシフィディウム・カエルレウム

健一郎

クシフィディウム・

カエルレウム（ハエモドルム科）

デンファレ（蘭科）

陶花器（市川博一作）

南米の春の花で、花屋さん曰く葉だけでは見かけるが、花が出荷されるのは珍しいので、撮影のために用意しましたとの事。初めて見る花だったのでゆつくりと楽しませてもらった。白い蕾が咲く前だったので、同じ熱帯のデンファレと合わせ、熱帯の自然を散策した。図鑑やインターネットで自生地を想像して生けた。シンプルな姿形をしてはいるが、クシフィディウムの周りはおそらく多種多様な生き物たちの暮らす場であるだろう。生物多様なこの地域では同じ木を探すことが難しいらしい。そんなことを想像していたらこの器に生けてみたくなった。



水仙一色

花伝書を見る

水仙一色（真・初版）

富春軒

水仙 金盞花 著我

（立花時勢粧・下 秘曲の図）

自由奔放な水仙の姿。これらは葉に針金を通して形作ったものではなく、すべて元々の姿であり、自然に曲がりくねった水仙を集め、役枝に配することで絶妙な花形を生み出している。

は雪に倒れ風に翻弄されても葉を伸ばそうとする命の姿であり、富春軒はそういうものに自然本来の力と美を見いだしている。まさに「花は野にあるように」挿している。



富春軒

稽古の花 ②

△表紙の花▽

11月7日撮影 仙溪

梅擬「ウインターベリー」
うめのもじり

(綱の木科)

薔薇(薔薇科)

スプレー菊(菊科)

陶花器

稽古花のとり合わせはできる限り花屋に行つてするようにしている。今の季節にこの花なら喜んでもらえるかな、というのが基準になる。前回と同じ花は



避けている。「またこの花？」とならないように。多くの花や木の中から、ピカッと光を放っているものを選ぶ。葉の状態、互いの色合い。

今回はバラに一目惚れ。悩んだ末にこの3種になった。(税抜き1300円。)



躑躅と乱れ菊の生花

仙溪

躑躅(躑躅科)

乱れ菊2種(菊科)

龍耳銅薄端

兵庫県いけばな協会創立70周年記念花展にゲストとして出品させていただいた。



苔をまとい葉を赤くしたツツジの美しさ。大自然の時の流れに思いを馳せる。そして乱れ菊のなんと優美なこと。

ツツジとキクの二種挿しをいけるのは初めてだったが、元々の姿をバズルのように組み合わせるだけでなんとか形になった。力のある花材をこなすのは

難しいが、木や花の力を損なわないようにすれば、自ずと良い表情を見せてくれるのだということ、今回は花に教わった。

なお、植物の専門家による花材名の確認をしておられたが、これはサツキですとのこと。知っているようで知らないことがまだまだ沢山ある。

中国の挿花 ②

仙溪

台湾・故宮博物院がデジタルで公開している所蔵品に中国挿花の痕跡を辿ってみた。前号は明代後期の宮廷肖像画だったが、今回は明代初期、宣徳帝（第5代皇帝）の時代の「歳朝図」を紹介したい。歳朝とは新年元日のことで、春節の風俗を描いた絵を「歳朝図」と呼んでいる。

左の軸は宣徳2年（1427年）、邊景昭（字は文進、明代初期の宮廷花鳥画家）による「歳朝図」で、古代の銅器（銅尊）に10種類の花などが挿されている。

梅（清高）

松（寿）

柏（誠実）

椿（富貴）

蘭（幽玄）

水仙（品潔）

南天（消災解厄）

柿（万事順調）

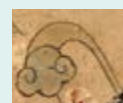
如意（自在）

靈芝（健康）

の10種それぞれに、徳や吉祥、厄除け、健康などを願う寓意があり、新年を迎えた宮中で実際に挿されたものを絵で記録し、その後、春節には毎年この絵を飾ったのだらう。絵の上部に見える



「靈芝」



「如意」

2首の詩は、300年後の清朝6代皇帝乾隆が書き加えたものである。

植物に個別の寓意をもたせ、その組み合わせを大切にするのは、中国挿花の重要な要素であるようだ。

いけ方は四方正面だろうか。如意や靈芝など多種類が調和し躍動感もある。高い教養と確かな技術を感じる。

さて、この挿花図が描かれた頃、日本は室町時代中期で、いけばなの歴史としては「立て花」が立てられはじめた頃にあたる。中国の挿花がどんな歴史をたどり、それぞれの時代の交流で日本の挿花がどのように影響を受けたのか、興味は尽きない。



「歳朝図」明代 邊景昭 台湾国立故宮博物院

歳朝とは正月の一日目をさし、歳朝を主題とした吉祥画が多く描かれた。この絵にも新春にふさわしい植物が描かれ、新年を迎えた喜びが満ちあふれている。邊景昭は明代初期、14c 末～15c 前半の宮廷画家。

出典：https://digitalarchive.npm.gov.tw/Painting/Content?pid=5790&Dept=P





イケバナインターナシヨ
ナル大阪例会
デモンストレーション

会期 11月17日(金)
会場 ホテルニューオータニ大阪
講師 桑原健一郎
(写真①)



風流なレモンとメイ。
「ヒイラギの香りがするにや」



エジプトはナイルの賜物^{たまもの}

健一郎

綿^{わた あわい}（葵科）

アロエ（百合科）

枯葦^{かれあし}（稲科）

金属花器（エジプト）

アロエは不老不死の植物として用いられており、ファラオ王に埋葬品としてアロエが贈られていたりしたという。そしてアロエが人々の美容と健康を支える植物でもあった。世界最長のナイル川が氾濫を起こし、エジプトに養分をもたらした。食べ物はもちろんそこから文明が築かれた。麦や綿を栽培し、そして葦で家を作って日々の生活を営んだ。川が生活を支えたのである。花を介して想像するとより感じられる気がする。花屋さんの花を通して生きている内に、年々世界中の気候帯や世界の植物の原生地を歩いてみたい気持ち募っている。長い目で見て、少しづつ予定を立てているところだ。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2024 年
12 月号
No. 738

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





冬の先に

仙溪

今年3月に華老の横田慶重先生が亡くなられた。師範会会長としていつも明るく元気に流派を引っ張って下さった。海外遠征でも現地の食事をもりもり食べ、ハードな毎日をこなしておられた。お寺に嫁いであらずと家のことを切り盛りながら、茶道と華道を極めてこられた凄い人。いけられる花はダイナミック。秋につくられる栗の渋皮煮は格別の味だった。先生が亡くなられたのは大きな悲しみだけど、家元となつて20年間ずっと支えてくださったことに感謝の気持ちでいっぱいだ。

「冬来りなば春遠からじ」育てられたお弟子さん達がそれぞれの道を歩いていかれるのを天国から応援してあげて下さいね。

晩秋の色

仙溪

ブルーベリー（躑躅科）

水仙（彼岸花科）

嵯峨菊（菊科）

陶花瓶

ここ数年でブルーベリーの紅葉も花材として定着してきた。



赤・白・緑

仙溪

ひいらぎもちのき
柊（繡の木科）

てつぽうゆり
鉄砲百合（百合科）

つづじ
レモンリーフ（躑躅科）

陶花瓶

クリスマスを意識して花も器も赤白緑で取り合わせた。白いユリは聖母マリアの象徴でもある。レモンリーフの緑が優しい。



他にもキイチゴやヒペリカムなど、秋色の枝ものに新たな仲間が加わってきた。
出始めのスイセンと。晩秋、初冬の投入花、



万年青の生花

十五葉二果

仙溪

万年青（百合科）

陶水盤

万年青は常緑の葉と赤い実に「長寿」「繁栄」を託して大切にされてきた。徳川家康が最初に江戸城に入るとき万年青を床の間に飾ったとあるように、大変縁起の良い植物だ。

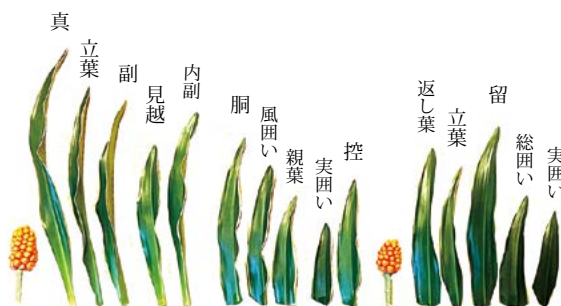
立花時勢粧には「藜蘆」「老母草」の字が使われ「葉組しまりたるは幽玄ならず、ゆるやかなる時はくだけて勢いなし」とし出生玄妙な姿を良しとしている。「半（奇数）に使うのが常だが、調（丁、偶数）に使ってもよい」とある。現在の生花において、流派によつては葉数を偶数にするところも多い。これは万年青の葉が対で出ることによるが、当流は葉数を奇数にしている。

万年青は5、6月の梅雨の頃に花を咲かせ、夏に緑色の実がみえる。気温の変化で実は赤く色づいて行くが、横から伸び出た葉によつて実は隠されていく。あたかも親（葉）が子（実）を寒風から守っているかのよう。

万年青をいけるときは、葉が実を守り育てているようにいけたい。

十五葉二果

留とめ
(流し葉)



△表紙の花▽
櫻子

車輪梅（薔薇科）
ブルーアイス（檜科）
アンズリウム（里芋科）

ポヘミアンガラス花器
シャリンバイは艶やかな
厚みのある葉が枝先に輪
のように並ぶ。身近によく
見かけるのだが、トベラや
モッコクともよく似ている
ので紛らわしい。

この枝は実がブルーベリーに似ているのでシャリンバイだ。バラ科シャリンバイ属。東アジアに自生する常緑低木。実に毒性は無



いが食べる部分が殆ど無い。いけるのは初めてだ。地味だが温かみがある。凍てつく中で輝いているような不思議な魅力があるブルーアイスを合わせて、強烈な赤色を感じるアンスリウムを覗かせた。同色のガラス花器で幻想的な景色になった。これからの季節に赤色は欠かせない。

△6頁の図▽

立花
うめもどきの
梅擬
除真

富春軒

梅擬うめもとき
松
柘植つげ
椿
晒木しやれぼく

菊2種
小菊
熊笹
枇杷

（立花時勢粧・中）

菊薫る秋の立花。

「立花時勢粧・中・雑体の図」の最初を飾る富春軒の立花。

真と請の枝垂れたウメモド
キによつて花形の中に目に見
えない球体を感じる。

左下水際から出た枯れ枝が、控枝の松と前後で重なり輪のように見えているが、この枯れ枝が花形の丸みを完成させているように思う。

花形に大小の円があり器の手も円形なので、見ているとしみじみとした「和」を感じる。自然が生んだ造形の調和。

花と器の調和。

空間と立花の調和。

それらの「和」が立花の醍醐味なのだ。

亥花時鉢中雜詠之圖



富春軒

(解説は5頁下)



躑躅除真立花

仙溪

躑躅2種(躑躅科)
 蔓梅擬(錦木科)
 黄金檜葉(檜科)
 木苺(薔薇科)
 竜胆2種(竜胆科)
 小菊2種(菊科)
 桔梗(桔梗科)
 杜鵑草(百合科)
 陶コンポート

立花研修会で立てて10日後に込藁ごと抜いて水を替え、傷んだ枝と花を挿し替えて撮影した。水を替えたり悪くなった部分を取り除き、新鮮な花材を加えることで、いけばなは長く楽しめる。



最初に立てた立花。



余韻

健一郎

立花

枝垂柳 しだれやなぎ 枇杷 びわ (斑入) ふいり

灯台躑躅 とうだんつづし 苔躑躅 こけつづし

竜胆 りんどう 撫子 なでしこ 小菊

場：鹿王院客殿 器：蝶耳銅立花瓶

「柳は緑、花は紅」数年前の自分と比べても、肩の力が少し抜けてきた。

お花屋さんが枝のよくしまった枝垂れ柳を用意してくれた。柳のみで生花にしようかと考えたが、次から次に生きたい花が目にとまり、立花になった。

昔は花街の事を花柳かりゅうといった。色と関わりのある言葉に柳がよく出てくるのは、川沿いに柳が植えられていることも関係あるだろうが、柳の持つ艶えんがそうさせているのだろうか。柳はつい見てしまう植物の一つで、さまざまな季節の柳が記憶の中にある。夏に頬に触れるひんやりとした柳、何も考えずぼんやりと見つめているだけの柳。最近では、子供と走りながら、顔や身体に触れる柳を楽しんでいる。

艶や、色気について考えたり感じたりする事が多い一年だった。感じてきたものが自ずから現れ出た立花になった。

「神社の感じがしました。」「植物を信頼しているのが伝わりました。」という言葉が、自分の中に残っている。

内から現れ出ているものなのだろうか。好奇心に身を任せ、ただ在り続けたい。



高山の景色

健一郎

乱れ菊数種

曝木

苔躑躅

竜胆

大文字草

美男葛

米梅

堂本印象美術館野外いけば
な展出品作

陶花器（竹内眞三郎作）

紅葉を楽しむ少し前の高山の植物が好きで、少なくとも、一年に一度は歩きにでかける。山では、春から秋にかけて忙しく季節が動く。岩と岩の隙間から顔を覗かせる竜胆や大文字草、そして雨風、日光に強く晒される事で曝木の景色が現れる。

今回のいけばな展のテーマ「秋の郷愁とモダニズム」にあわせて、もともと信仰心があつての山登りが、スポーツとしての山登りとして広まり、多くの人が高山の花を見る事ができるようになったという時代背景を意識して、その景色を表現した。

中国の挿花 ⑬

仙溪

中国では春節（旧暦の正月）に、幸福を招いて厄を除ける願いを込めて、家に飾っていた年画を貼り替える習慣があつて、今でも地方で行われている。年画は民間の木版画であり、

そのまま部屋や扉に貼って一年を過ごす。

もともと桃の木に彫った門神像を門にかける風習が漢代にあったのが、絵師による絵に変わり、やがて明時代（1368～1644）の版画技術の広まり

によつて庶民の間で木版年画が生まれ

たそうだ。年画には農民が農閑期に1人でつくる素朴なものから、絵師、彫り師、摺師が分業でつくる精緻な物まであり、題材も門神、財神、縁起の良い植物・

動物、芝居や物語の人物や場面、子ども

の道德教育など様々だ。

素生々 谷猶含雪香透
疎影自知 亮氏題



『花卉博古图』丁亮先 清時代 18世紀中頃 紙本 木版 多色摺 空摺 海の見える杜美術館所蔵
37.5 × 30.1cm 出典：『蘇州版画の光芒 国際都市に華ひらいた民衆芸術』2023年特別展図録

『花卉博古图』は丁亮先という絵師が描いた吉祥画の木版刷りで、子宝を暗示するザクロや、特殊な能力を持つ芭蕉扇（軍配に似た道具）、花が咲き出る筆（李太白の夢に出てきた筆花）などとともに、白梅と赤椿の挿花が描かれている。梅は「好文木」とも呼ばれ、学問の象徴として知られている。手前の箱に

疎影横斜水清浅
暗香浮动月黄昏

（梅の）疎らかな枝は清い流れの水に斜めに影を映し、ほのかな香りが月の昇るたそがれ時にどこからともなく漂ってくる。

とあるのは、北宋の詩人・林逋の詩の有名な一節で、対で門柱に書かれることが多いそうだ。（一対の句は対聯と呼び、春節に赤い紙に書かれたものを門の両側に貼るのを春聯と呼ぶ）

かつての中国の一部かもしれないけれど、花を花瓶に挿した絵が、庶民の日々の暮らしを明るく照らしていた。高尚な挿花を絵に描いてまで身近に置こうとした中国人の、花に対する思いがどんなものなのか、もっと知りたくなってくる。



実と花の間

櫻子

山茱萸（水木科）
さんしゅうゆ みずぎ

雪柳（薔薇科）
ゆきやなぎ ばら

菊（菊科）

陶花瓶（幾左田昌宏作）

赤い実のサンシュユと薄紅色の立派なキク。ユキヤナギの紅葉が間を優しく繋いでくれた。濃紫色の花瓶で気品が増す。



⑥玄関で不動のレモン師匠。

⑤あっちこっち気になるメイ。

